牧口常三郎のペンネーム「澎湃」名義の作品について

岩　木　勇　作

▼解題

本資料紹介では、「澎湃」名義の作品を紹介する。牧口常三郎のペンネーム「澎湃」については、すでに「創価教育の源流」編纂委員会編『評伝牧口常三郎』（第三文明社、2017 年）の 94 ～ 96 頁および脚注の中で示されている。しかし、端的に「澎湃」名義の作品と同一人判定の理由が述べられているに留まるため、論証が不十分であることは否めない。とはいえ、牧口のペンネームを発見した功績こそ賞讃されるべきであり、評伝という形式や紙数の都合上、多くの頁を割いてペンネーム問題を詳しく論証することができなかったとしてもそれは仕方のないことであろう。この発見によって、牧口の上京後に携わった仕事や当時の交友関係に関する解明が進んでいる。

本解題は、前掲『評伝牧口常三郎』で提起された牧口のペンネーム「澎湃」説を、その同一人判定の論拠を検討・補説し、再構成することを目的としている。

「澎湃」名義の作品が掲載されているのは、北海道教育会発行の『北海道教育雑誌』と金港堂出版物である。時系列順で言えば、『北海道教育雑誌』の掲載が先であるが、論証の順序として、金港堂出版物の方から見ていきたい。

1．金港堂出版物に掲載された「澎湃」名義の作品

（1）金港堂について

金港堂は、1875 年に原亮三郎によって創業された出版社で、単行本としては教育関係書が多く、小学校教科書出版事業を主としていたが、1901 年に営業の方針を変更し、1901 ～ 1902 年にかけて金港堂七大雑誌と呼ばれる『教育界』（1901 年 11 月 3 日）、『少年界』（1902 年 2 月 11 日）、『文芸界』（1902 年 3 月 15 日）、『少女界』（1902 年 4 月 11 日）、『軍事界』（1902 年 5 月 5 日）、『婦人界』（1902 年 7 月 1 日）、『青年界』（1902 年 7 月 1 日）を創刊している。明治 20 年代には著名な出版社として知られていたが、1902 年 12 月の教科書疑獄事件以降は凋落し、現在では知られざる出版社となっている [1]。

Yusaku Iwaki（創価大学非常勤講師）

[1] 金港堂の歴史およびその経営については、稲岡勝『明治期出版史上の金港堂―社史のない出版社「史」の試み―』（皓星社、2019 年）を参照。

(2) 牧口の入社時期

まずは牧口の金港堂への入社時期を確認しておく。牧口が勤めたのは1年に満たない期間であるが、それは金港堂の同僚で文学者の斎藤弔花が「『人生地理学』の著者に与ふ」(『神戸新聞』1903年10月20日付5面)で、「予の金港堂に入るや、(中略)独り足下は炯然として、明星のごとく、異彩を放てり(中略)足下が一年ならずして、去るや」と言及していることから分かる。

この言及から、斎藤の入社より前に牧口が勤めていることが窺えるので、先に斎藤の金港堂への入社時期を確認する。

原田秋浦「不遇時代の独歩君」(『国木田独歩全集』第10巻、学習研究社、1967年に収録)によれば、「最初は権五郎神社の境内に浪宅を構へて、僕に独歩君、それに、斎藤弔花君を併せて都合三人、言はゞ、落武者の浪人共が寄り集つて梁山泊気取りで居たのである、が、梁山泊時代は甚だ短かかつた、権五郎祠前を引き払つて長谷の池別荘へ転ずると共に、弔花君は去つて金港堂へ入社したので」(312頁)と述べている。同書収録の年譜によれば、1902年2月8日の項目に、「斎藤弔花と共に鎌倉権五郎神社神主の借家に入る」。同年4月28日の項目に、「この前後、一家鎌倉長谷なる村田久兵衛の別荘その他に転々と移住」とあるため、この証言を基に、斎藤弔花の金港堂への入社が1902年4月下旬頃であることが分かる。そうすると、牧口の入社時期は1902年4月以前となる。

(3) ペンネーム「澎湃」

ペンネーム「澎湃」は、いくつかのバリエーションを以て表記されている。以下、金港堂出版物に収録された該当タイトルとペンネーム表記(ゴチック)を年代順に列記する。目次と本文で異なる場合は目次、本文の順で記載した。

①『熊とり』、1902年8月…**澎湃子**

②「前祝いと後仕舞」(『園遊会』、1902年10月)…**牧口生、牧口澎湃**

③「手紙の書き方」(『少女界』第1巻第10号、1902年12月)…**はうはい子、ほうはい子**

④「瓜生岩女史」(『少女界』第2巻第1号、1903年1月)…**澎湃子**

⑤「雪の色々」(『少女界』第2巻第1号、同上)…**澎湃、ほうはい子**

⑥「雪の色々」(『少女界』第2巻第2号、1903年2月)…**澎湃子、はうはい子**

⑦「少女の自修」(『少女界』第2巻第2号、同上)…**記者、澎湃**

「生」「子」は、名前の下に添えて謙遜の意を表す辞なので、基本的には「澎湃」「ほうはい」がペンネームとなる。③⑥の「はうはい」は「ほうはい」の誤植である。以上の7点の資料のうち、明確に牧口常三郎と澎湃の関連性を示しているのが、②の小説集『園遊会』収録の「前祝いと後仕舞」である。

小説集『園遊会』は金港堂から1902年10月10日に刊行された。金港堂が営業の方針を拡張してから1周年の祝賀として、全国の同業者を創業者の原亮三郎の別荘へ招き園遊会を開催した。その園遊会の来会者に配ったのが、小説集『園遊会』である。同書では、同年10月10日の園遊

会の様子に触れている文章がいくつか収録されているが、園遊会をテーマにしているだけで、実際の様子を描写したものではない。「園遊会」は『日本国語大辞典』（第2版、小学館、2001年）によれば、garden partyの訳語で、祝賀、披露、社交などのため、庭園に摸擬飲食店や演芸場を設け、多くの客を招いてもてなす会、のこと。明治20年前後から用いられ始め、同30年代には大流行した。『園遊会』に収録された、園遊亭一席「飛入素人咄し」は、10月10日の園遊会の様子を空想して園遊会での余興をおもしろおかしく書いている。冒頭に「今日金港堂の御主人原さんの此の別荘で、日本全国の書林方と懇親を結ぶ為、かやうに園遊会を開かれましたが、かねて思ひ設けた通り、招待状を受けられた人々が、四方八方から馳せ集られて、人数凡そ二百人夫にこなたの御親族や社員其の外をうちまぜて、太平記流に十倍の懸け直をしたら、都合其の勢四千余騎とぞ註されけるとでも申すべき程でございます。」（5頁）とあるのは、関係者であれば、事前情報で書けることである。大体400名ぐらいを想定していたのであろう。

『読売新聞』（1902年10月13日付2面）の記事を見ると、「金港堂の園遊会　書肆金港堂にてハ昨年十月以来小学校教科用図書の出版を止め同時に営業の方針を拡張せし一周年紀念祝賀として去る十日下谷の原氏別墅に於て全国の同業者を招待し園遊会を催したり来会者五百余名紀念の為め園遊会と題せる小冊子を寄贈せり」と報じられており、10月10日の金港堂の園遊会には500余名の来会者があり、『園遊会』が配布されたようである。来会者は、『園遊会』に目を通し、園遊会にちなんだ様々な演目に頬をゆるめ、心おどらせたことだろう。

『園遊会』の目次を見ると、「園遊会」という大項目の下に、19名の著者が園遊会をテーマに、小説、エッセイ、小咄等様々な文章を寄せている。また「小説」という大項目の下には、小説家として著名な徳田秋声、国木田独歩、広津柳浪の短編小説が掲載されている。

『園遊会』に収録された、②「前祝いと後仕舞」の内容については、各資料の解説で述べるとして、同作品には、ペンネームの同一人判定として重要な記載がある。目次に「牧口生」、そして本文に「牧口澎湃」とある。目次の「園遊会」の大項目以下に並んでいる19名の著者を掲載順に記すと小谷栗村、園遊亭一席、池辺藤園、すゞの屋、岡本三山、琴月小史、折山法師、斎藤弔花、草村北星、綾部野圃、野田まづま、牧口生（牧口澎湃）、平尾不孤、池田蘇雲、神谷鶴伴、道楽坊主、森桂園、新保一邨（新保一村）、醒雪訳（醉醒雪訳）となる[2]。19名すべての素性は追い切れないが、その多くが金港堂出版物の編集に関わっている人物と考えられる。現時点で分かっているだけでも、小谷、琴月、斎藤、草村、野田、平尾、神谷、森、醒雪は、金港堂の出版物及び雑誌編集に関わっている人物であることが指摘されている[3]。

---

[2]（　）内は本文の表記が目次と異なる場合に挿入している。

[3] 前掲『明治期出版史上の金港堂』、24～28頁、296～305頁参照。

(4) 牧口の退社時期

『少女界』第2巻第3号（1903年3月11日刊）の神谷鶴伴の「今度、前少女界記者の澎湃君は、都合あつてやめられましたから、専ら私が後を引受けて編輯をすることになりました」（111頁）との記事から、澎湃が『少女界』の編集を担当していたこと、1903年2月頃には、金港堂を退社したことが分かる。

以上のことから、牧口常三郎が金港堂に所属していた期間と、澎湃は『少女界』の編集で牧口生または牧口澎湃とも名乗っていたこと、澎湃は1903年2月頃には金港堂を退社したこと、が明らかとなる。牧口常三郎＝澎湃が、ほぼ確定し、牧口常三郎が金港堂に所属していた時期が、1902年3月頃から1903年2月頃までの1年未満と特定できる。現在までに確認できている「澎湃」名義の作品もすべてこの期間に発表されている。『園遊会』を刊行する時期に金港堂に所属していた「牧口」が、牧口常三郎以外にもう一人居たとするのは、あまりに穿ちすぎであるし、そういった形跡も確認できない。

牧口が担当した『少女界』は1902年4月11日に創刊された。その編集主任はかつての先輩教員であり、北海道師範学校校長も歴任した岡本常次郎である。岡本は1902年2月11日に創刊された『少年界』も編集主任を担当しているが、「我が少年界に主任として、第一号発行以来、精励尽瘁せられし岡本常次郎君は、此度退社せられたり」（『少年界』第1巻第11号、1902年11月11日刊、55頁）の記事によって、1902年10月頃には金港堂を退社していることが分かる。おそらく牧口は『少女界』の立ち上げに際し、岡本によって金港堂に呼ばれ、同誌の編集に携わったが、岡本は1902年10月頃には退社しているので、牧口が代わりに編集主任的な役割を果たしたのではないかと推察される。『少女界』第2巻第3号の神谷が澎湃の退社を告げた「専ら私が後を引受けて編輯をすることになりました」という記事もそれを物語っている。つまり、『少女界』は創刊の1902年4月（岡本）――岡本退社の同年10月頃（澎湃）――澎湃退社の1903年2月頃（神谷）という形で短期間に編集の責任者が替わっていることになる。

(5)『評伝牧口常三郎』が挙げたペンネームの論拠を検証

牧口のペンネームとして「澎湃」説を提起したのは前掲『評伝牧口常三郎』である。同書では、その論拠として次の3点を挙げた。

Ⅰ. 金港堂から1902年に発行された金港堂お伽噺シリーズの一冊『熊とり』の著者は「本社編輯」で、著者の「澎湃子」は同書で以前北海道に居たと述べていること。

Ⅱ. 金港堂から1902年10月に発行された『園遊会』は同年の金港堂主催の園遊会出席者に配布するために印刷されたものであるが、同書は同社関係者で執筆されており、そこに「牧口澎湃」が名を連ねている。同社で他に牧口姓はいない。

Ⅲ. 北海道教育会発行の『北海道教育雑誌』には「澎湃」の名で書かれた論説が2点存在しており、どちらも牧口が『北海道教育雑誌』の編集委員を担当していた時期に掲載されている。同誌の論説を編集委員がペンネームで執筆することがあったようである。

以上の3点から牧口常三郎＝澎湃説を立てている。

この3つの論拠について言えることは、Ⅰは、『熊とり』がお伽噺という作品である以上、実際のことを述べているとは限らないということが指摘できる。確かに作品の冒頭に「私が昔し北海道に居た時分に、一人のアイヌのお爺さんと、懇意になりました。」（1頁）と述べているが、結局は作品世界内での記述であり、事実を述べたとは限らない。『熊とり』は実話を述べたもの等の証言が出て来れば別であるが、現時点では、ペンネーム説の論拠にはできない。Ⅱは、本解題で述べてきた通り、「牧口生」「牧口澎湃」の表記が、ペンネーム「澎湃」説の論拠となる。Ⅲは、編集委員がペンネームで執筆することがあったようである、ということまでしか言えない。ペンネームで執筆するのが編集委員と限定することもできなければ、論説は必ず編集委員の執筆によるわけでもない。無記名、記名、ペンネームに関わらず、様々な人物が執筆をしている。牧口が『北海道教育雑誌』の編集委員を担当していた時期に「澎湃」名義で、論説欄に2つの論考が掲載された以上のことは現時点では分からない、ということが指摘できる。

ペンネーム「澎湃」説の論拠として使えるのはⅡである。斎藤弔花の証言（「『人生地理学』の著者に与ふ」）によって、牧口常三郎が金港堂に入社していたこと、およびその時期が推定できる。そして『園遊会』収録の「前祝いと後仕舞」の著者名表記「牧口生」「牧口澎湃」によって、金港堂に勤めていた「牧口」が「澎湃」とも名乗っていたことが分かる。Ⅰ．Ⅲ．については、金港堂出版物における「澎湃」名義の作品の著者が牧口常三郎であることが確定した後に検証すべき事柄である。

『評伝牧口常三郎』の記述は、端的ではあったが、ペンネーム「澎湃」説を提起し、『園遊会』収録作品の著者名表記、斎藤弔花の証言を材料として提出しているため、論証のために必要な材料は概ね提示されていたと言える。本解題のここまでの記述は、『評伝牧口常三郎』で提起されたペンネーム「澎湃」説をその材料と共に検証し、再構成したものである。

(6)「雪の色々」と「雪と人生」

前掲『評伝牧口常三郎』発刊の2017年以降に、新たに確認できた「澎湃」名義の作品として、⑥「雪の色々」（『少女界』第2巻第2号、1903年2月）、⑦「少女の自修」（『少女界』同号）がある。特に⑥は、ペンネーム「澎湃」と牧口の同一人判定を行う上でも重要な資料となる。2017年の段階では、前半部分である⑤「雪の色々」（『少女界』第2巻第1号、1903年1月）までしか分かっていなかったが、今回『少女界』第2巻第2号が確認できたことにより、「雪の色々」の全体が判明した[4]。

「雪の色々」と牧口著『人生地理学』（文会堂、1903年10月刊）第19章「気候」の第10節「雪と人生」セクションとを比較すると、内容面で明らかな関連性を指摘することができる。前者は4700字程度、後者は1400字程度と文章量は異なる。「雪の色々」では、読者である少女向けに、

[4] 『少女界』第2巻第2号については石川武美記念図書館で閲覧させていただいた。この場を借りて感謝申し上げる。当該資料の発見は池田大作記念創価教育研究所客員研究員の塩原將行氏のご教示による。

雪の「色々」が綴られている。「色々」とはまさしく人生の様々な側面を指している。以下で、その明確な関連性を示す箇所を具体的に確認しておく。⑤⑥の資料と比較参照されたい。

「雪の色々」の「一　雪の美」は、「雪と人生」冒頭の「雪の吾人に於ける直接なる関係の最も卑近なるは、そが晩秋の蕭条たる乾坤を一変して満眸一面の銀界を開展して冬の景色を飾るにあり。寂寞なる世界は之が為に陽気に立ち還り人は之が為に其感情を鮮にし、自ら／雪ふれば冬こもりせる草も木も／春にしられぬ花ぞ咲きける　　紀貫之／の感を生ず。」（『牧口常三郎全集』第2巻、第三文明社、1996年、78頁、「／」は引用者が改行位置を示したもの、以降も同様）と関連する。

「二　雪と松」は、「雪と人生」の「或は松柏の緑色に映じて其節操を彰はすが如き」（同78頁）と関連する。

「三　雪の結晶」は、「雪と人生」冒頭の「雪は水蒸気冷却の程度の氷点以下に達せるによりて、其分子が直ちに結晶し美麗なる形状と、純白なる色を表はして下降せるものなるが」（同78頁）と関連する。

「四　雪の国」は、「雪と人生」の「或は奥羽及び北海道に於ては雪の半歳は、殆んと動植物と等しく冬眠の生活をなすもの少からず。」（同78頁）と関連する。

「五　豊年の兆」は、「雪と人生」の「若し又た雪帯地方の農民が雪の多き以て豊作の兆となすが如きは、仮令多くの迷信を含むとするも、無下に看却すべからざるものにはあらざるか、蓋し雪が植物の冬眠の夜具となりし、寒風より彼等を擁護するのみならず、其圧力は以て麦茎等の早伸を抑ふに足り、其他落葉の肥化に、其転送に、考察し来れば農業に幾多の関係あるは掩ふべからさる事実なり。」（同79頁）と関連する。

「六　雪のあそび」については対象とする読者の違いからか「雪と人生」には見出せない。

「七　雪のめぐみ」は、「雪と人生」の「雪の人生に対する是等多方面の交渉は社会の文化の発達と、或る関係を生せすしては止まざるが如し。古代の文明国が悉く降雪地帯にあらざりしに現在の文明国が悉く降雪地帯にあらざるなきを観れば、あながち附会の想像にあらざるを信ずるを得。想ふに終歳一様の温暖なる気候は、以て其住民をして安逸の生活を送らしむるに足り、之に伴ふ絶えざる食料の供給は、彼等をして未来の準備をなす念を生ぜざらしむ。従つて無為徒食の生活の域に安んぜしむるに足るに、降雪地方に於ては其事情全く反対するが故に然るか。資本の余剰が世界の開明の重要なる一原因にして其源は雪中生活の準備にあるを知らば容易に以上の理由は首肯するを得べけん。」（同79頁）と関連する。

「八　雪と歴史」は、「雪と人生」の「或は吾人の貞操義烈の歴史を聯想する機会となる如き、将た又た其潔白にして一点の汚点なき所、其公平にして金殿玉楼も茅屋柴扉も一様に蔽ふ所等、数へ来れば雪か吾人に対する影響の侮るべからさるものあるを知る。」（同78頁）と関連する。

「九　雪と戦争」は、「雪と人生」の「雪と人生の尚ほ見逃すべからざる一の関係は戦争にあり。若し暖国民と寒国民とが戦端を開くときは、前者は後者に対して二重の強敵を覚悟せざるべからす。一は直接の戦闘力にして、他は其気候、就中雪なり。之れ元禄の役、及ひ日清の役に於て、

我国民の経験せる所。想ふて是に至れば葡萄の生熟する北緯四十五度の適温地帯に発育したる仏蘭西国民が、堅凍積雪によりて鉄の如き軀幹を得たる北緯六十度のスラブ民族と、而かも厳冬に戦ふ。ナポレオンの英邁を以てすとも勝敗の数知るべきのみ。」（同 79 ～ 80 頁）と関連する。

「十　雪と我邦」は、「雪と人生」の「是れ実に北方の民族と生存競争をせざるべからざる我が国民の一日も忘るべからざる所。仮令士卒は以て相応の防寒の用意をするを得とするも、戦闘力に大なる関係を有する馬匹に布子を着せしむる能はざることは最もよく日清戦争に経験したる所なればなり。此点より見れば北海道は実に我邦に於ける特殊の天恵と云はさるべからず。」（同 80 頁）と関連する。

文章量が異なるため、記述に濃淡の差は表れてしまうが、趣旨は同じである。『人生地理学』の志賀重昂の序によれば、牧口が志賀に会いに行った 1903 年春の段階で草稿が 2000 頁程あり、それを出版時には半分にしているとのことである。実際に同書の最終頁を見ると 995 頁となっている。つまり、牧口の「雪の色々」が掲載された 1903 年 1 月～ 2 月段階では、2000 頁程の草稿を元に書いたであろうことを指摘することができる。「雪の色々」と「雪と人生」の違いは、読者層の違いから文章量が異なるということも指摘できるだろうが、執筆時点では草稿が 2000 頁程だったこともその理由として挙げてよいだろう。

また、牧口は『人生地理学』発刊以後も、雪と人生に関する作品を発表している。「雪の色々」と「雪と人生」、さらに「雪と人生現象」（『教育の実際』第 5 巻第 3 号、教育実際社、1911 年 1 月、60 ～ 65 頁）の 3 つの文章の関わりについては、拙稿「明治期の教科書に掲載された牧口常三郎の文章に関する考察」（『東洋哲学研究所紀要』第 39 号、東洋哲学研究所、2024 年 2 月）でも指摘しているので、そちらも参照されたい。

以上のことから、金港堂の出版物における 1902 年 3 月頃～ 1903 年 2 月頃までに掲載された「澎湃」「ほうはい」名義による作品は、牧口常三郎によるものと確定できる。むしろ、金港堂出版物における牧口常三郎＝澎湃説を認めなかった場合、金港堂には、牧口および澎湃を名乗っている人物が、牧口常三郎とは別人として同時期に存在し、その人物が、『人生地理学』と明らかに関連性のある文章を、同書出版前に書いたというナンセンスな結論に陥ってしまうので、金港堂出版物における牧口＝澎湃説については認めるほかない。

2.『北海道教育雑誌』に掲載された「澎湃」名義の作品

（1）北海道教育会と牧口

『北海道教育会雑誌』（後に『北海道教育雑誌』に改称）は 1891 年 3 月 31 日に創刊された北海道教育会（同年 4 月発足）の機関雑誌である。北海道教育会と北海道尋常師範学校（以降、北海道師範学校）との関係は深く、発足時の副会長･山名次郎は北海道師範学校の校長であり、以後、同校の校長に着任した人物は、同会の理事等を歴任している。また同師範学校の教員の多くが執筆者として名を連ねている。北海道師範学校の教員である牧口は 1898 年 3 月から『北海道教育

雑誌』の編集委員を担当し[5]、1899年9月頃には北海道教育会の理事（幹事）となる。この時期には前任者から引き継ぐ形で編集主任も務めた可能性がある[6]。編集主任は、1901年4月6日付で同会理事を辞任するまで続いた。牧口の後の理事兼編集主任は、岩谷英太郎が担当した[7]。

さて前掲『評伝牧口常三郎』では、牧口＝澎湃説の論拠として、「Ⅲ.北海道教育会発行の『北海道教育雑誌』には「澎湃」の名で書かれた論説が2点存在しており、どちらも牧口が『北海道教育雑誌』の編集委員を担当していた時期に掲載されている。同誌の論説を編集委員がペンネームで執筆することがあったようである。」を挙げていた。この論拠だけでは、『北海道教育雑誌』における牧口＝澎湃は成り立たないが、前述のように、金港堂出版物における「澎湃」名義の作品が牧口常三郎によることが明らかになったため、『北海道教育雑誌』の「澎湃」も牧口である蓋然性が出て来た。ただし、時系列的に言えば、『北海道教育雑誌』の「澎湃」は金港堂の「澎湃」よりも前に位置づけられるため、可能性として考えられるのは、

【1】牧口常三郎は『北海道教育雑誌』誌上で「澎湃」を使い始め、このペンネームを金港堂に勤めている間も使った。

【2】牧口常三郎は、金港堂に勤めてから「澎湃」を使い始めた。この場合「澎湃」は北海道教育会に関係する誰かから引き継いでいる可能性がある。

の2つである。

素直に考えるならば【1】であろう。【2】の場合、『北海道教育雑誌』の「澎湃」と牧口は親しい関係にあることは想定できる。牧口が『北海道教育雑誌』の編集委員や編集主任であった以上、論説欄に掲載された「澎湃」を知らなかったということは想定しづらいし、無断で自身のペンネームとして借用したということも考えづらい。

「澎湃」というペンネームが他に皆無かというとそうでもない。同時代的には、「海上澎湃」[8]、「潮田澎湃」[9]などが他誌面で確認できる。『北海道教育雑誌』における澎湃も牧口である蓋然性は高いが、【1】を積極的に支持する材料が無い、【2】を完全に排除できるだけの材料が無い、というのが実際のところである。

（2）論説記事と「澎湃」

以下、『北海道教育雑誌』に掲載された「澎湃」名義の作品の該当タイトルとペンネーム表記（ゴチック）を年代順に列記する。目次と本文で異なる場合は目次、本文の順で記載した。どちらも論説欄に掲載。

⑧「教員と当事者との衝突を如何すべき」（『北海道教育雑誌』第81号、1899年10月）……**澎湃子、澎湃**

---

[5] 『北海道教育雑誌』第63号、1898年2月27日刊、40頁参照。

[6] 同第82号、1899年11月25日刊、42～43頁参照。

[7] 同第100号、1901年5月25日刊、50～51頁参照。同第99号の発行日は4月25日。

[8] 海上澎湃「近海の海軍」『海軍』第5巻第2号、光村出版部、1910年、参照。

[9] 潮田澎湃「武漢動乱余譚」『冒険世界』第3巻第1号、博文館、1912年、参照。

⑨「漢字節減と仮名遣改良実施の結果如何」（『北海道教育雑誌』第92号、1900年9月）……**澎湃**

論説欄には、記名記事、無記名記事[10]、ペンネーム記事といったスタイルの記事が掲載されている。試みに、以下で牧口が編集に関わった第63号～98号前後の同誌の編集体制[11]と、1891年3月（創刊号）から牧口が上京する1901年4月24日まで（第98号）に論説欄に登場したペンネームをピックアップしておく。

牧口が『北海道教育雑誌』の編集に関わった時期の編集体制

〈第52号〉折戸亀太郎、大村益荒、菊池金正、小林到、御子柴五百彦の5名。

〈第63号〉大村益荒、小林到、御子柴五百彦、岩谷直次郎、牧口常三郎の5名。

〈第65号〉御子柴五百彦、小林到、大村益荒、岩谷直次郎、牧口常三郎、吉村成利の6名。

〈第73号〉大村益荒、小林到、岩谷直次郎、牧口常三郎の4名。

〈第82号〉大村益荒、小林到、岩谷直次郎、牧口常三郎、吉田元利、工藤金彦の6名。

〈第87号〉大村益荒、小林到、牧口常三郎、吉田元利、工藤金彦の5名。

〈第91号〉大村益荒、小林到、牧口常三郎、吉田元利、工藤金彦、西田常男、和田義信の7名。

〈第95号〉牧口常三郎、大村益荒、吉田元利、工藤金彦、和田義信、小林到の6名。

〈第100号〉岩谷英太郎、大村益荒、吉田元利、工藤金彦、和田義信、小林到の6名。

創刊号から第98号までに論説欄に掲載された記事のペンネーム

抱宇庵居士（『北海道教育会雑誌』第2号）、十水生（同第7号）、遶雲生（同第10号）、帰陽散人（同第12号）、冷眼子（『北海道教育雑誌』第9号）、三角錫（同第10号）、雪嶽居士（同第11号）、十水生（同第13号）、雪嶽居士（同第13号）、傍観生（同第20号）、三角錫子（同第22号）、三角錫子（同第23号）、K生（同第34号）、**縈山子**（同第40号）、**縈山子**（同第41号）、自恣生（同第51号）、麓六生（同第52号）、陵城生（同第53号）、観傍生（同第53号）、麓六生（同第54号）、赤誠子（同第54号）、有邪無邪居士（同第57号）、今野松風子（同第60号）、有邪無邪居士（同第60号）、**岩谷北陰**（同第61号）、**岩谷北陰**（同第62号）、吉岡生（同第63号）、十勿（同第63号）、十勿（同第64号）、**岩谷北陰**（同第73号）、岡常生（同第74号）、華陵（同第75号）、華陵（同第76号）、**岩谷北陰**（同第76号）、**嶺北生**（同第80号）、**嶺北生**（同第82号）、澎湃（同第81号）、**岩谷北陰**（同第84号）、**岩谷北陰**（同第85号）、澎湃（同第92号）、華陵（同第96号）、華陵（同第97号）、華陵（同第98号）[12]。

---

[10] 無記名記事は、講演内容の紹介等で編集委員がまとめた記事が多い。

[11] 〈　〉内は『北海道教育雑誌』の該当号で編集体制が報じられたことを指している。

[12] 『北海道教育会雑誌』の名称は1891年3月の創刊第1号から第15号まで。その後、『北海道教育雑誌』に改称され、1892年9月30日から第1号として始まる。ペンネームをピックアップするにあたっては、覆刻編集委員会監修『北海道教育会機関誌』第8巻（上）～第10巻（下）、1983～1984年、文化評論社、の目次を参照した。

編集委員のペンネームとして判明しているものは、ゴチックで示しておいた。（岩谷直次郎のペンネームは、岩谷北陰＝北陰子＝嶺北生。大村益荒のペンネームは、縈山子＝大村縈山）。また、以上で取り上げたのは、ペンネーム記事のみであり、論説欄には、多くの記名記事と無記名記事が存在することを改めて確認しておく。

そもそも『北海道教育雑誌』の論説欄は必ず編集委員が書くものとは決まっていない。牧口が編集を担当していた時期も編集委員以外の多くの論者の記事が掲載されている。論説欄では編集委員はペンネームで書くという慣行があるわけでもない。牧口も第96号に記名記事を論説欄で書いている。編集委員を牧口と同時期に担当している小林到や大村益荒も同様に論説欄に記名記事がある。岩谷直次郎については、論説欄に記名記事は無かったが厳密に使い分けているわけでもないのだろう。

改めて前掲『評伝牧口常三郎』が挙げたⅢの論拠を検討すると、確かに牧口が編集委員を担当していた時期に、「澎湃」名義の作品が2回掲載されていること、論説欄に編集委員のペンネーム記事が掲載されていることが窺える。

しかし、この論拠だけで『北海道教育雑誌』における牧口＝澎湃説を立てるのは決め手に欠けてしまうのである。現状では、「澎湃」を牧口と関連付けるのは、金港堂出版物における牧口＝澎湃説の確定以外にない。

（3）論説記事と牧口常三郎

牧口常三郎名義の文章が『北海道教育雑誌』に掲載されたのは、初掲載の第36号（1895年10月15日刊）から第96号（1901年1月25日刊）までで、合計61回。そのうち論説欄に掲載されたのは以下の2回である。

第62号（1898年2月27日）、論説「開発教授の一弊」

第96号（1901年1月25日）、論説「社会的教育学の実地的方面」

ちなみに第81号の論説欄で⑧澎湃「教員と当事者との衝突を如何すべき」が掲載された同号の教授及管理欄には、牧口常三郎「興味の永続せる遊戯の一種」が掲載されている。誌面構成上、編集者として同一人名義の作品が同号中に何度も掲載されることを避けたというのは、あり得るかもしれない。そのために「澎湃」のペンネームが使われたのだろうか。ただし、第65号では牧口常三郎名義で「児童観念界の一端」と「北海道読本応用作文教材一例」が掲載されているので、編集委員を担当していた時期であっても牧口の記名記事が複数掲載された事例はあった。続いて考えるべきは、内容的な関連性であろうが、現時点では見いだせていない。

以上のことから、『北海道教育雑誌』誌上の「澎湃」を牧口常三郎であると断定できる材料はないものの、蓋然性は高いという理由から、⑧⑨も参考資料として紹介し解説もしておく。今後の研究の進捗を期する。

3. 資料の表記および凡例

各資料の冒頭には書誌情報を主とした簡単な解説を付してある。①、③～⑦の作品は、対象とする読者に初等教育段階の子どもが含まれており、1902 ～ 1903 年の期間に作成されているため、棒引き仮名遣い（新定字音仮名遣い）が採用されている。これは、1900 年 8 月 21 日公布の小学校令施行規則第 1 章第 1 節第 16 条の「小学校ニ於テ教授ニ用フル仮名及其ノ字体ハ第一号表ニ、字音仮名遣ハ第二号表下欄ニ依リ又漢字ハ成ルヘク其ノ数ヲ節減シテ応用広キモノヲ選フヘシ／尋常小学校ニ於テ教授ニ用フル漢字ハ成ルヘク第三号表ニ掲クル文字ノ範囲内ニ於テ之ヲ選フヘシ」[13] の規定を反映したものである。

ルビ（振仮名）は、ほぼ総ルビであるが、現代の漢字の読みとは必ずしも一致するわけではない。これは、明治期の日本語の表現にかなり自由度があったことが考えられる[14]。例えば、「大切（だいじ）」、「隣家（となり）」、「状（ありさま）」、「翌る日（あくひ）」、「例（いつも）」「断念（あきら）め」、「気質（たち）」など。

凡例は以下の通りである。

一、資料を復元するにあたって、特に断らない限りは、創価大学池田大作記念創価教育研究所所蔵資料を原典とした。

一、漢字は新字体に統一した。仮名遣いは、基本的に原文のママ。ただし、変体仮名、仮名合字は現代仮名遣いに改めた箇所がある。

一、原文の縦書きを横書きに改めたため、踊り字のくの字点は、該当する平仮名・漢字で表記した。

一、原文のルビ、傍線、傍点、傍丸を反映した。なお傍線は下線で統一している。

一、誤字・誤植等が見られた箇所も原文の通り表記している。

一、図は省略した。

一、現代では不適切と思われる表現があるが、作品の時代背景を考慮し原文のママとした。

①『熊とり』

＜解説＞

澎湃子『熊とり』。金港堂から出版されたお伽噺シリーズのうちの 1 冊。奥付を見ると、発行年月日は 1902 年 8 月 22 日。発行兼印刷者は、金港堂書籍株式会社。代表者は、原亮一郎。印刷所は、日進舎。同書の裏表紙を見ると、「少年の読物」として、お伽噺シリーズのほかに、お伽草紙、おどけ噺、豪傑噺、戦争噺、修身噺、動物噺、が毎土曜日に出版されると予告されている。

本作品は、アイヌの熊捕名人のお爺さんが語った熊捕の方法とその体験談が中心となっている。話し相手は、作者「澎湃子」と考えられる少年で、「私が昔し北海道に居た時分に、一人のアイ

[13] 『官報』第 5141 号、1900 年 8 月 21 日、315 頁。

[14] 今野真二『振仮名の歴史』岩波現代文庫、2020 年、参照。

ヌのお爺さんと、懇意になりました。」という書き出しで始まる。この話が、実際に牧口がアイヌのお爺さんに聞いた話を復元したものであるかどうかは不明だが、アイヌの酒好きやブシ矢などのエピソードから、牧口が北海道時代にアイヌの人々と交流があったことを窺わせる。

牧口のアイヌ観･北海道開拓観が現れた最初期の作品といえる「北海道読本応用作文教材一例」では、『北海道用尋常小学読本』を使った文章改作の例を提示している。

『北海道用尋常小学読本』巻5の第13課は「信広死にて後、子孫相つぎ、一族益繁昌し、慶広の時、豊臣秀吉より、豊臣の姓をうけしが、後松前とあらためたり。／北海道は、昔えぞが島と称へて、アイヌの住みたる土地なりしが、信広来りてより、アイヌをうち従へ、次第に、山野を開き、道路を通ずるに至れり。／されば信広は、北海道開拓の基を、立てたるものなりとて、明治十四年、今上天皇、北海道御じゆんかうの時、ことに正四位をおくりたまへり。」（『北海道用尋常小学読本』巻5、文部省、1897年9月22日発行、17～18丁。傍線は引用者。国立教育政策研究所教育図書館所蔵）とある。

牧口は「北海道読本応用作文教材一例」で、この文章を使った改作の例を提示しているが「我家は先祖の、、、か死して子孫相つぎ一族益繁昌し今の我父の代となりたり」／我等の村も昔えぞが島と称へてアイヌ住みたる土地なりしが内地の人が来りてよりアイヌは次第に遠くにけゆきたりと云ふ」（『北海道教育雑誌』第65号、北海道教育会、1898年5月31日発行、14～15頁。傍線引用者。）と記述している。

「、」の箇所を改作して各自の村の記事を作ることを目的としているのだが、『北海道用尋常小学読本』と牧口の文章を比べると、前者が武田信広の視点で北海道開拓を称揚するのに対し、後者はアイヌに対する同情的な視点が窺える。この点に関しては、前掲『評伝牧口常三郎』でも同様の指摘をしている（同書122頁）。改めて『熊とり』を牧口の作品として味わってみると、そこには隣人として、アイヌの熊捕名人のお爺さんに対する敬意と親しみが根底にあることが分かるだろう。この敬意と親しみこそは北海道時代にアイヌとの交流によって育まれたものであったのではないかと考えられる。

本作品は、挿絵入りの冊子として出版されており、挿絵自体が作品を構成する要素として考えられるので画像も掲載する。

＜本文＞

金港堂
お伽噺　熊とり

澎　湃　子

私が昔し北海道に居た時分に、一人のアイヌのお爺さんと、懇意になりました。そのお爺さんはモう八十歳近くにもなりませうか、髪も鬚もみんな雪のよーに真白になりて、顔一ぱいにしわがよつて、眼がくぼんで居て、一寸見ると怖そーでありますけれども、よくよく交際て見ると、まことにやさしくて、親切な老人でありました。そして此お爺さんは若い時から、熊捕の名

人だとアイヌ仲間では、大変に人から敬はれて居ました。だが、可笑いことには、此お爺さんは、額の半分と、片々の眼が、欠けて無くなつて居るのです。ですから暗黒な夜などに、ひよつと此爺さんに逢つたもんなら、それこそ妖怪に逢つたよーに、誰でも吃驚しないものはない位です。けれども此の片額と片眼のないところが、此爺さんの、仲間の人々から、敬はれる所なので、これがすなわち、熊捕の名人の印なのです、そしてこれについて、余つ程面白い、怖いお話があるのです。

或晩に、私が例の通り、面白い談を聴かうと思ひまして、この爺さんの家へ遊びに行きました。いろいろ話をしたのちに、私は、

『お爺さん、お前さんの片々の額と、片々の眼とは、一たいドウ為さつたの？』

と、問ひ掛けましたが、後から考へて、ハツとしたのです。それはお爺さんが、怒つたら大変だと、考へたからです。ところがお爺さんは案外に、怒つた様子もなくて、

『これか？これは熊が、持て去つて仕舞つたのヨ』

『では其わけを談して頂戴な。ドウゾ』

と、私はすかさず問ひ返しました。が、お爺さんは

『ソリヤ、ソウ容易くは、談は出来ないよ。お酒を一 升 持って来なけりや』

と、笑顔したっきり黙って仕舞ひました。

アイヌの一番好きなものは、お酒であります。ですから、どんなに怖はそーなアイヌでも、お酒を持って行きさへすれば、ニコニコ顔で、どんな面白いお噺でもして呉れますし、又どんなに大切にして仕舞つて置く宝物でも、出して見せて呉れるのです。ですから昔しは、たったお酒一升でもつて、大きな熊の皮と、取り替へコしたといふ面白い事が、度々あつたそーです。

そこで、このお爺さんも、お酒さへ持って来れば、きっとお噺をして呉れると、私は思ひましたが、しかし私は其の怖はそうな、面白そうなお噺を、一時も早く聞きたくて、聞きたくて、とても明日の晩までは待つて居られなくなったから、

『では、明日の晩、きっとお酒を持って来ますから、少ーしばかりでも、今お噺して頂戴な、ドウゾ、ドウゾ』

と手を合はして頼みました。そこで、お爺さんは、仕方がなくなつたものと見えて

『それでは、少し許りお噺して上やう』とかう申しまして、そこで兎に角、お噺をすることになりまして、お爺さんは、真白な、長い鬚の中にうづまって居る、大きな口を動かして、はなし初めました。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

私は幼さいときから、弓を射ることが大好であつたが、大きくなつてからも、ちつとも変らないで、こんどは熊を捕ること大好になつて、今までに、大きな熊を捕ったのは、どの位あるか知れないよ。その中には、怖しいことも沢山あったが、大きな熊を捕つたときの、面白味といふものは、なかなか忘れられませんよ。沢山の恐しかったことの中に、一番怖かつたのが二度ありました。一番初めに出逢ったのは……

私が若かった時分には、まだ、この北海道も、ごく開けないので、熊が大変に沢山、あちらこちらの山に棲んで、居て折々人家のある所へ出て来て、人間を荒したものです。そこで吾々の仲間で一生懸命になつて、捕りまして、仲々取り尽せる所ではなく、却つてだんだん殖えて来るので、之れにはまことに困つたのです。だから御上でも、熊一疋うち捕つて、その四つの足を脚つて行けば、直ぐに沢山なお金を褒美として、下さつたもんです。

或ときに一疋の熊が、奥山に喰べ物がなくなつたと見えて、この村へ下りて来て、ついこの先の、私の隣家のその又一軒措いて隣家の、丁度主人が漁に出掛けて、母と子供ばかりで、留守居をして居る所へ遣つて来て、母も子供も、のこらず喰ひ殺して仕舞つた、それはそれは、今思ひ出しても、身の毛の慓立つほどの事がありました。尤も此んな事は、昔し未だ開けない時分には度々あつたもんです。

晩になつて、其家の主人が、漁から帰つて来て見ると、家内中残らず殺されて、在つたもんですから、それはそれは吃驚したのです。主人は大変力を落して一時は気狂のよーになつたが、また思ひ直して、今度は大変に腹を立てゝ、思はず、

『己れ、熊めッ、打ち取らずに、置くもんか』

と叫びました、

その中に隣り近所のものも、この事を聞き伝へて、だんだん集って来ました。来るものも、来るものも、此惨酷い状を見ては身の毛を慓だてないものはなく、そして之をした熊につひて怒らぬものはありませんでした。

サアそこで大騒になつた。翌る日には村中の男だちは総立ちに為つて、てんでに弓を持つて歯噛をして勇み立つた。そこで私も幼さいときから大好の熊捕りですから、吾れこそは一番功名をしてやらうと思つて、真つ先に立つて進み出した。私の持つて行つた弓は、私の父から譲り受けたのであつたから、煤のために真黒になつて居たが、サビタの太い木で拵へた、五尺余りもある強い弓でありました。其大きな弓をひっ担いで大勢の人と一緒に出たときの元気といふものは、ちようど戦争へでも出たよーで、それはそれは、すばらしいものでありました。

サピタの木といふのはアイヌ共が、其細い枝の心をつき抜いて煙管にする物です。アイヌはこの弓にブシ矢といつて、大変毒のある薬を、矢の先へつけた竹の矢をうつてやるのです。その矢は竹で造つてあるけれども小刀で削ってあるから、するどく尖ってあります。それに恐ろしい毒の薬が、鏃につけてあるもんだから、一度此矢に当つたもんなら、どんな猛ひ獣でも、忽ち斃れて仕舞ふのです。その又薬といふのはブシといふ毒草の実に何かを調合するといふことですけれども、之れはアイヌの先祖伝来の大切な、秘伝で、どうしても吾々には談しはして呉れないのです。

谷を超え、川をこぎ、断崖を攀ぢ、大人の背のたけよりも高く密生するクマザサをこぎ分け。葡萄蔓やこくは蔓などが、真暗に樹から樹に纏絡って、そして其下に大きな朽木の倒れて居るのを踏み越えして、みんながだんだん山奥へ狩り立てゝ行きました。

そこでさすがの熊も、沢山の人から狩り立てられては堪まりません。あちらにもこちらにも人

声がして、そして其人々はみなてんでに、恐ろしい弓を持つて居りますもんですから、やはり人間には叶はないと感じたと見え、今度は怖がつて、あちらこちらを、うろつき廻はるよーになりました。

その中に、誰れかゞ笹藪の中から、ちらと姿を見付けたといふと、たちまちみんなに知れ渡つて、スワこそ出て来たと、ますます勇み立ち、なほも笹藪をこぎわけて進んだ。けれども、熊はさすがに年中山を駆け廻つて、歩るいて居るだけあつて、人間さへも、やつとこぎ別けて、這入つて行く程、密に生いた竹藪を、あの大きな身体を以て、苦もなくくゞり廻つて、笹の音さへも立てぬ程の敏捷さといふものは驚き入る許りで、仲々多年の間、熊捕を熟練した名人でも手におへませんでした。

あちこち逐ひ廻はして居る中に、慥か誰れかゞ射た矢が、一発ウマク当つたといふ評判が伝はつて来た。たが、當り所が悪るかつたと見えて、イヤ熊のためには當り所が好かつたと見えて、まだ斃れたと云ふことの知らせはありませんでした。

傷負の熊ほど怖いものはない。傷の付かぬ間は、彼れも恐ろしがつて逃げ廻つて歩くが、サア少しでも傷を負ふてからといふものは、もう人間の怖ひことなんぞは、すつかり忘れて仕舞つて、恐ろしい見幕になつて狂ひ廻はる、そして何んでもかでも手当り次第に掻き裂くのです。ひよつとして、そいつに出つ会はそうもんなら、それこそ大変、いきなり其鋭い爪で以て、引き掻き殺されるのです。

かう考へ出してから、身の丈に余る熊笹の、一間と先の見へない程の薄暗い藪の中に居ることは何時どの方からやつて来るか、知れやしないから、其物凄さといふものは何とも言ひ様がない程でした。笹の音が「ガサッ」とすれば、そら、やつて来たと、「ゾツト」する。といつて今更逃げ出すことも容易でない。さうかうする間に、三四間先の藪の中に「ガサガサ」とする音がした。サア愈々遣つて来たナ、「今こそ」と、用意してあつた例のブシ矢を弓に番へて、身構したが、其時ははや熊は眼前に顕はれた。人間の姿が見えるか否や、猛り狂った熊は、ニユット立ち上って、「ウワッ」と叫んだ。

真黒く、身体一抔に生へ茂つた、バラバラした毛が一本一本に逆立て、目をキヨロキヨロ光らし、白い牙をむき出した其見幕といふものは、今思ひ出してさへ、ゾットするくらゐで、其の恐しさといふものは、談にも何になつたものではない。

「南無三宝」もう助からないと思ふと、身体が縮み上つて、そこへ倒れて仕舞つた。其刹那に熊は、忽ち私の身体に乗り掛つたが、私の倒れたのに、少し気抜けがしたと見え、そして私がもう死んで仕舞つたと思つたと見えて、いきなり私に食い付きもせず、頭の上に「フウフウ」いつて居る。万に一つも助かることもあらうかと、私は呼吸を凝らして俯いて居たが、其甲斐もなく、熊は其恐い爪で私の頭を引っ掻いた。と思ふとそれっきり後はどうなつたかさっぱり解らなくなつて仕舞つた。

後で、他の人に介抱して貰つて、気が付て見ると。私の顔がこんなに掻き取られてありました。幸ひに命丈は助かったが。その時の恐しさと、無念さといふものはとても忘れる事は出来ない。

これが私の熊捕りについて出会はした第一番目の怖かつたのです後は又 明 晩……

恐しくもあるが亦大層面白いお噺を早く聞きたさに、翌る晩には、日の暮れるのを待ち兼ねて、昨夜の約束の通り、お酒を手に提げて、アイヌのお爺さんの家へ行きました。するとお爺さんは大変酒好きの人でしたから、大 悦 の顔をして次の噺をしました。

熊のためにサンザンな目に逢はされてからといふものは、一時は熊が大変怖くなつて、もうとても熊捕は出来ないと思つたが、しかし考へ直して見れば、まことに心外で心外でたまりせんから、そこで傷が直るか否や、「今度こそは」と、又元気を取り直して、熊捕に出掛けた。

ところが不思儀や、傷を受ける前まで大変怖くて、ビクビクして居たのが、すっかりかはって、大きに度胸が座つて来て、何時熊に出会はしても、ビクともしないよーになり、そこで今度はほんとうに面白くなつて、度々大きな奴を捕ったことがあります。

或る日、例の通り、奥山に這入つて熊捕をして居た時に、又向ふの谷底に一疋の大熊を見付けた。其と私との間は大凡二三十間もあつたでせう。逃しては大変だと思ふて、私は直ぐに身 構して、射やうとした。熊の方でも、「ヂロリ」と私を見付けた。私が今、矢を放たうとして居た所ですから、先きでももう堪らぬと考へたと見えて、例の通りに毛を逆立てゝ、恐ろしい顔して、こちらを見掛けて登つて来る。私は「今だ」と思つて、有る丈の力を絞つて弦を曳いた矢は「ヒユー」と音して放れた。

大 丈 夫、中つたと悦んだが、それは私の思ひ違ひで熊は平気で上って来る。

「シマツタ」と思つて、次ぎの矢を放たうとしたが、其中に熊は、もう間近く迫つて来ました。其 間は僅か四五間しかない。今ははやとても次ぎの矢を放つ丈けの暇はない。と云つて逃げる暇は猶更ない。熊と競争したもんなら、熊は私よりは、五倍も六倍も速く走るから。もう熊に組み付いて諸共にうち死するより外仕方がないと覚悟を極めた。そして思はず腰の回に手を下げたが。こゝに一つ大変のことが起りました。

それはつい今が今まで、腰にぶら下げて居たと思つた大切の大切の「マキリ」（小刀）が見えないのです。いくら大胆な者でも、かうなつては驚かんでは居られない。私も「がつかり」して、もう「だめだ」と断念めました。

ふと辺りを見廻はしたら、大きな木が立つて居たから。万に一つも私の命を助けて呉れるものは、此の木より外にはないと、もう後先の考もなにもなしに、いきなり其木に飛び付いた。私が一 生 懸念になつて、木の枝に掻き上つて、二間許り登つたと思ふ時分には、もう熊は木の根本へ飛んで来た頃だ。私は怖はくて怖はくてとても木の下を顧る暇はない。一目散に木の端に攀ぢ上つた。

木の枝の繁つた所で、こゝならばしっかりつかまって居さへすれば、落ちることはあるまいと思ふ所へ、一先づ身を落ち付けて、ソツト下を窺いて見ると、案に違はず、熊は木の下に来て居て、キラキラした眼を輝かし、真白い牙をむき出して、今にも喰い付くといはぬばっかりの顔をして、私の方を睨んで居る。

先づ一安心とは云つたが、それはとてもだめらしい。何故かといふに、熊は鋭い硬い爪を持

つて居るから大きな木なら、すぐ抱き付て、爪を「ゾプゾプ」木に差し込んで、登つて来ることは、わけはないのである。若し又樹が細くて抱き付かれぬ時には、樹の根本を両手で攫んで、恐しい力で樹をゆす振らうもんなら、樹は忽ち折れて仕舞ふ。よし又折れぬにした所が、振り落さるゝことは極まつて居る。だから今の自分の身はまるで鼠が猫に睨まれたやうなもので、遅かれ早かれ命を取られることは、目に見えて居る。

けれども私は怖はくてたまらんから降りて行く勇気はどうしても起らない。そこで怖いながら、樹の枝にしっかり、攫まって居たれば、其中に日はもう暮れて仕舞つた。

今上って来るか、今上って来るかと、樹の葉が「ザワ」といふと吃驚しては居りましたが、とうとう上つて来る様子はない。けれども其晩は少しも寝ることは出来ない。その中に手がだるくなつて、コロゲ落そうになつたが、枝を放したら大変だと、無理にしっかり攫って居ました。とうとうこの風にして一夜を明かした。夜が明けたから、下を窺いて見たら、相変らず上を睨らんで居ました。そしてよく見ると、ちっとも瞬きもしないで上を見て居ました。

私は之には二度びっくりしましたが、又ハテナ変んだナ」と考へました。そこで私はためしに、小い枯枝を一本折つて、下へ落して見ました。きっと熊は怒つて、上つて来るかと思ふて、身を縮めて見て居ましたが、不思議や、上つて来る様子もない。益々変だと思ひましたから、今度はもっと大きな枝を折つて、力を入れて熊の頭にぶっけてやりましたが、なかなか当りませんでした。三ッも四ッも投げて居る間に、やっと一つうまく当りました。が、それでも平気で、矢張瞬きもしません。益々不思議になつて、今度は大きな声を出して叫んで見ましたが、これでも何とも動きません。

どうしたんだらうと益々不審になつたから、思ひ切つて二枝三枝、下りて来て、又枯枝をほうり投げたけれども、何ともない。能く能く見た所が。何んだか熊は樹の根元までやって来て、上を睨んだまゝ死んで終つて居たよーです。それでも怖いと思うたが、思ひ切って下りて来て見ると、さきに外れたと思つた矢が、全く当ったので、ブシ矢の毒が、よく身体にまはらなかった内に此処までやって来たのが、茲へ来るともう身体にまはって、其まゝ死んでしまったのでありました。

そこで私は、もう熊にとられたもんだと断念た命を無事にたすかりました。

序に熊を捕る仕方を、お噺して上げませう。

アイヌが熊を捕るには種々の仕方があります。ブシ矢で以て捕りますのは、昔しのアイヌが専ら用ゐた仕方でありますが、今では多く鉄砲で以て捕ります。鉄砲を肩にして、熊捕に出掛けるときには、大概大きな、よく慣らした狩犬を二疋も三疋も連れて行きまして、熊の穴を見付けると、犬を穴の口へ遣つて、「ワンワン」吠えさせ、そして自分は遙か後の方に居て、狙を定めるのです。中に睡むつて居る熊が、犬の「ワンワンワン」といふ声に目を醒まし、そして犬の吠え立てるのを、うるさがって穴からノコノコ這ひ出して来るところを、「ズドン」と撃ち取るのです。

若し犬が居ないときには、枯枝や枯草などを持つて来て、穴の口に積んで、それに火を点ける

のです。さうすると煙が一抔の中へ這入りますから、熊はとても中に居るわけに行きませんから、大層怒って這ひ出して来る、そこを狙つて「ヅドン」と撃ち取ります。

この時に穴の口で、木の円太を幾本も、立て掛けて置くと便利であります。何ぜかといふと熊といふ奴は、手を以て邪魔な物を、外の方へ押し出すことは出来ませんで、何んでも手に攫んで力任せに内の方へ掻い込むもんですから、口の所に太ひ木が、立て掛けて在ると、先づそれを穴の中へ掻ひ込まうとする、所が木は根元がしっかり土の中へ差し込んであり、そして端は長いから、折らなければとても這入らない、そこで熊が木のためにもだへて居る所を、「ヅドン」と撃つのです。

種々の仕方でとりますが、若しその時運が悪るくて、旨まく当らないときは直ぐに、その熊に追つ立てられて、逃げ出すのです。そして追って来る熊の後では、犬が「ワンワン」吠え立てるので、熊はそれがうるさくって堪まらぬから、今度はその犬の方へ懸りますから、其隙を見て、第二の弾丸を放って。撃ち留めるのです。

若し又それでも旨く当らないで、そしてもう逃げる暇がないときには、仕方がないから、熊に跳び掛つて行って、頸筋の所の長い毛に、しっかり攫って熊の腹へくっついて、なんぼ振り放さふとしても離れないのです。熊の爪はこう身体へ敵がくっ付いては、どうにもならない、其暇を見て腰に提げて在るマキリ（小刀）を抜いて、咽喉の所へ突き立てるのです。

＜画像＞

金港堂お伽噺

熊捕る

澎湃子

私が昔し北海道に居た時分に、一人のアイヌのお爺さんと、懇意になりました。そのお爺さんはもう八十歳近くにもなりませうか、髪も鬚もみんな雪のよーに眞白になりて、顔一ぱいにしわがよつて、眼がくぼんで居て、一寸見ると怖そーでありますけれども、よく〳〵交際て見ると、まことにやさしくて、親切な老人でありました。そして此お爺さんは若い

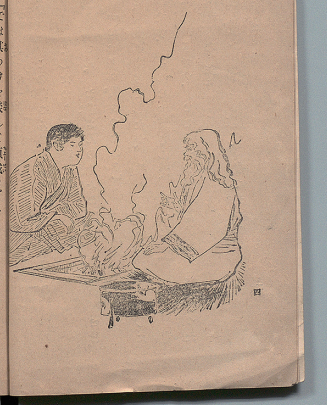
時から、熊捕の名人だとアイヌ仲間では、大變に人から敬はれて居ました。だが、可笑いことには、此お爺さんは、額の半分と、片々の眼が、欠けて無くなつて居るのです。ですから暗黒な夜なぞに、ひよつと此お爺さんに逢つたもんなら、それこそ妖怪に逢つたまーに、誰でも吃驚しないものはない位です。けれども此の片額と片眼のないところが、此お爺さんの、仲間の人々から、敬はれる所なので、これがすなはち、熊捕の名人の印なのです、そしてこれについて、餘つ程面白い、怖いお話があるのです。

或晩に、私が例の通り、面白い談を聽かうと思ひまして、この爺さんの家へ遊びに行きました。いろ〳〵話をしたのちに、私は、

『お爺さん、お前さんの片々の額と、片々の眼とは、一体どーゆ爲さつたの？』

と、問ひ掛けましたが、後から考へて、ハッとしたのです。それはお爺さんが、怒つたら大變だと、考へたからです。ところがお爺さんは案外に、怒つた樣子もなくて、

『これか？これは熊が、持て去つて仕舞つたのヨ』



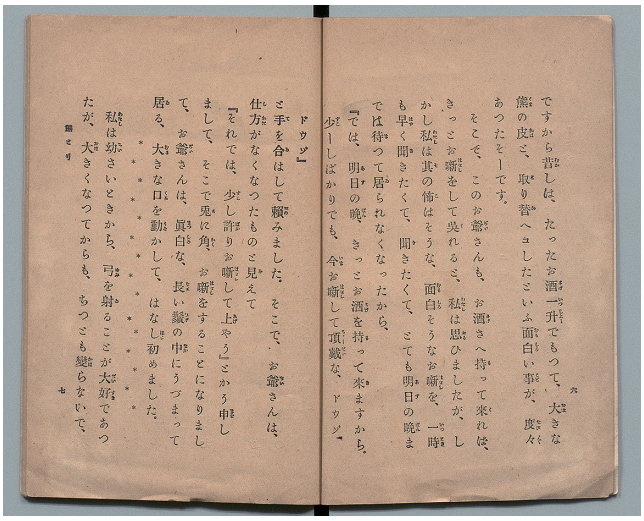
『では其わけを談して頂戴な。ドウゾ』

と、私はすかさず問ひ返しました、が、お爺さんは

『ソリヤ、ソウ容易くは、談は出來ないよ。お酒を一升持って來なけりゃ』

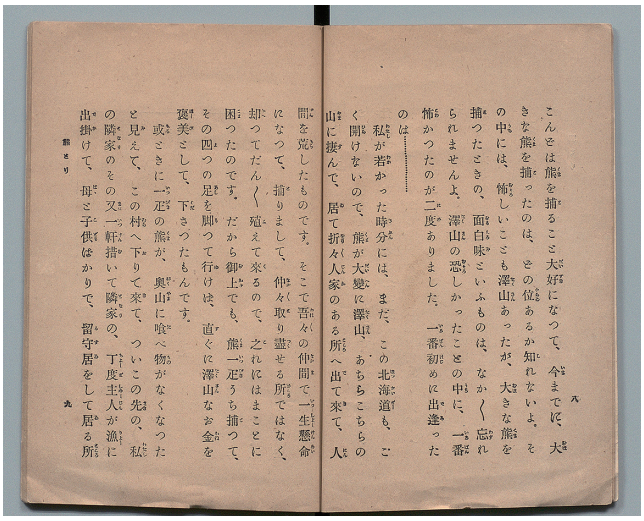
と、笑顔したつきり默って仕舞ひました。

アイヌの一番好きなものは、お酒であります。ですから、どんなに怖はそーなアイヌでも、お酒を持って行きさへすれば、ニコ〳〵顔で、どんな面白いお噺でもして呉れますし、又どんなに大切にして仕舞つて置く寶物でも、出して見せて呉れるのです。

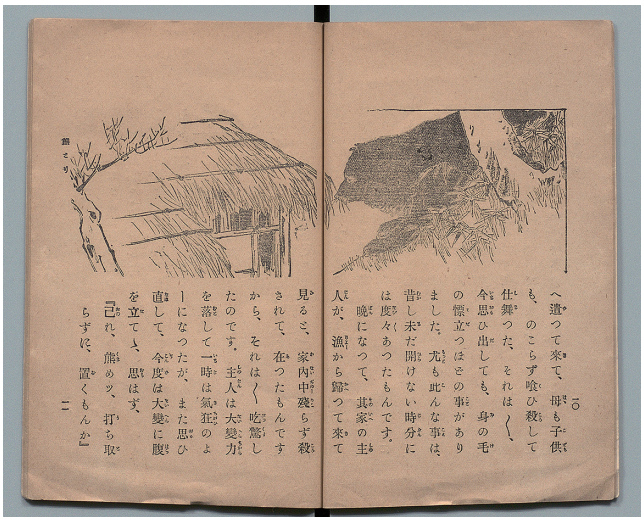


ですから昔しは、たったお酒一升でもつて、大きな
熊の皮と、取り替へコしたといふ面白い事が、度々
あつたそーです。
そこで、このお爺さんも、お酒さへ持つて來れば、
きっとお嚊をして喚れると、私は思ひましたが、し
かし私は其の情はそうな、面白そうなお嚊を、一時
も早く聞きたくて、聞きたくて、とても明日の晩ま
では待つて居られなくなったから、
『では、明日の晩、きっとお酒を持つて來ますから、
少しばかりでも、今お嚊して頂戴な、ドッジ』

ドッジ』
と手を合はして頼みました。そこで、お爺さんは、
仕方がなくなつたものと見えて
『それでは、少し許りお嚊して上やう』とかう申し
まして、そこで兎に角、お嚊をすることになりまし
て、お爺さんは、眞白な、長い鬚の中にうづまって
居る、大きな口を動かして、はなし初めました。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
私は幼さいときから、弓を射ることが大好であつ
たが、大きくなつてからも、ちっとも變らないで、



こんどは熊を捕ること大好になつて、今までに、大
きな熊を捕ったのは、どの位あるか知れないよ。そ
の中には、怖しいことも澤山あったが、大きな熊を
捕つたときの、面白味といふものは、なか〳〵忘れ
られませんよ、澤山の恐しかったことの中に、一番
怖かつたのが二度ありました。一番初めに出逢った
のは……
私が若かった時分には、まだ、この北海道も、ご
く開けないので、熊が大變に澤山、あちらこちらの
山に棲んで、居て折々人家のある所へ出て來て、人



間を荒したものです。そこで吾々の仲間で一生懸命
になつて、捕りまして、仲々取り盡せる所ではなく、
却つてだん〳〵殖えて來るので、之れにはまことに
困つたのです。だから御上でも、熊一疋ろも捕つて、
その四つの足を脚つて行けば、直ぐに澤山なお金を
褒美として、下さつたもんです。
或ときに一疋の熊が、奥山に喰べ物がなくなつた
と見えて、この村へ下りて來て、ついこの先の、私
の隣家のその又一軒置いて隣家の、丁度主人が漁に
出掛けて、母と子供ばかりで、留守居をして居る所

へ遣つて來て、母も子供
も、のこらず喰ひ殺して
仕舞つた、それは〳〵、
今思ひ出しても、身の毛
の慄立つほどの事があり
ました。尤も此んな事は、
昔し未だ開けない時分に
は度々あつたもんです。
晩になつて、其家の主
人が、漁から歸つて來て

見ると、家内中殘らず殺
されて、在つたもんです
から、それは〳〵吃驚し
たのです。主人は大變力
を落して一時は氣狂のよ
ーになつたが、また思ひ
直して、今度は大變に腹
を立てゝ、思はず、
『己れ、熊めッ、打ち取
らずに、置くもんか』

と叫びました。

その中に隣り近所のものも、この事を聞き傳へて、だん〳〵集って來ました。來るものも、來るものも、此惨酷い狀を見ては身の毛を慄だてないものはなく、そして之をした熊につひて怒らぬものはありませんでした。

サアそこで大騒になつた。翌る日には村中の男だちは總立ちに爲つて、てんでに弓を持つて齒噛をして勇み立つた。そこで私も幼さいときから大好の熊捕りですから、吾れこそは一番功名をしてやらうと思つて、直つ先に立つて進み出した。私の持つて行つた弓は、私の父から譲り受けたのであつたから、煤のために眞黑になつて居たが、

サヒタの大い木で拵へた、五尺餘りもある強い弓でありました。其大きな弓をひっ擔いで大勢の人と一緒に出たときの元氣といふものは、もうとも戰爭へでも出たよーで、それは〳〵、すばらしいものでありました。

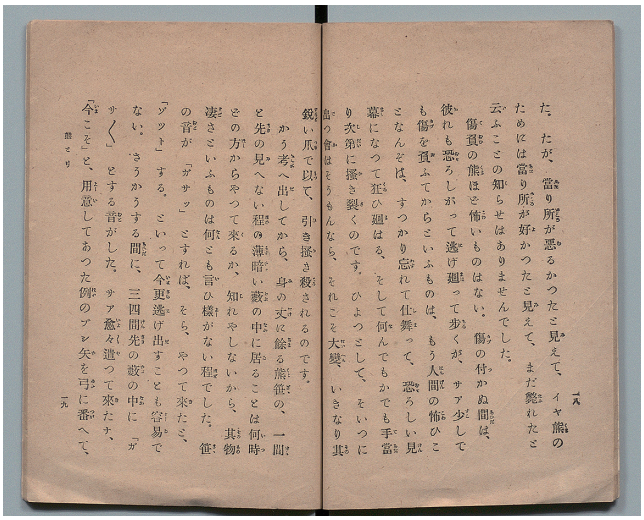
サヒタの木といふのはアイヌ共が、其細い枝の心をつき拔いて煙管にする物です。アイヌはこの弓にブシ矢といつて、大變毒のある藥を、矢の先へつけた竹の矢をうつてやるのです。その矢は竹で造つてあるけれども小刀で削ってあるから、するどく尖ってあります。それに恐ろしい毒の藥が、繼につけてあるもんだから、一度此矢に當つたものなら、どんな猛ひ獸でも、忽ち斃れて仕舞ふのです。その又藥といふのはブシといふ毒草の實に何かを調合するといふことですけれども、之れはアイヌの先祖傳代の大切な、秘傳で、どうしても吾々には識しはして呉れないのです。

谷を超え、川をこえ、斷崖を攀ぢ、大人の背のたけよりも高く密生するクマザサをこぎ分け、葡萄蔓やこくは蔓をとが、眞暗に棚から棚に纏繞って、そして其下に大きな朽木の倒れて居るのを踏み越えして、みんながだん〳〵山奥へ狩り立て行きました。

そこでさすがの熊も、澤山の人から狩り立てられては堪まりません。あちらにもこちらにも人聲がして、そして其人々はみなてんでに、恐ろしい弓を持つて居りますもんですから、やはり人間には叶はないと感じたと見え、今度は怖がつて、あちらこちらを、うろつき廻はるよーになりました。

その中に、誰れかゞ笹藪の中から、ちらと姿を見付けたといふと、たちまちみんなに知れ渡つて、スッこを出て來たと、まず〳〵勇み立ち、なほも笹藪をさぐわけて進んだ。けれども、熊はさすがに年中山を駈け廻つて、歩いて居るだけあつて、人間さへも、やつとこぎ別けて、這入って行く程、密に生いた竹藪を、あの大きな身體を以て、若もなくゞり廻つて、笹の音きへも立てぬ程の敏捷さといふものは驚き入る許りで、伸々多年の間、熊捕を熟練した名人でも手におへませんでした。

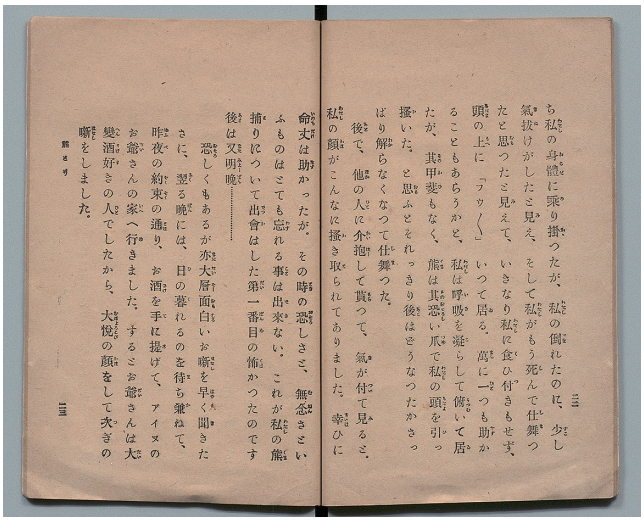
あちこち遂ひ廻はして居る中に、誰か誰れかゞ射た矢が、一發ウマク當つたといふ評判が傳はつて來



た。たが、當り所が惡るかつたと見えて、イヤ熊の
ためには當り所が好かつたと見えて、まだ斃れたと
云ふことの知らせはありませんでした。
傷負の熊ほど怖いものはない。傷の付かぬ間は、
彼れも恐ろしがつて逃げ廻つて歩くが、サア少しで
も傷を負ふからといふものは、もう人間の怖ひこと
となんぞは、すつかり忘れて仕舞つて、恐ろしい見
幕になつて狂ひ廻はる、そして何んでもかでも手當
り次第に掻き裂くのです。ひよつとして、をいつに
鳥う會はをうもんなら、それこそ大變、いきなり其

鋭い爪で思て、引き掻き裂されるのです。
かう考へ出してから、身の丈に餘る熊笹の、一間
と先の見へない程の薄暗い藪の中に居ることは何時
その方からやつて來るか、知れやしないから、其物
凄さといふものは何とも言ひ樣がない程でした。笹
の音が、「ザサッ」とすれば、そら、やつて來たと、
「ゾット」する。といつて今更逃げ出すことも容易で
ない。「さうかうする間に、三四間先の藪の中に、「ガ
サ〳〵」とする音がした。サア愈々遭つて來たナ、
「今こそ」と、用意してあつた例のブシ矢を弓に番へて、

身構したが、其時ははや熊は眼前に顯はれた、人間
の姿が見えるか否や、猛り狂つた熊は、ニユツト立
ち上つて、「ウッ」と叫んだ。
眞黑く、身體一杯に生へ茂つた、バサ〳〵した毛
が一本一本に逆立て、目をキヨロ〳〵光らし、白い
牙をむき出した其見幕といふものは、今思ひ出して
さへ、ゾツトするくらゐで、其の恐しさといふもの
は、談にも何になつたものではない。
「南無三寶」もう助からないと思ふと、身體が縮み
上つて、そこへ倒れて仕舞つた。其刹那に熊は、忽



ち私の身體に乘り掛つたが、私の倒れたのに、少し
氣拔けがしたと見え、そして私がもう死んで仕舞つ
たと思つたと見えて、いきなり私に食ひ付きもせず、
頭の上に「フッ〳〵」いつて居る、萬に一つも助か
ることもあらうかと、私は呼吸を凝らして傾いて居
たが、其甲斐もなく、熊は其恐しい爪で私の頭を引っ
掻いた。と思ふとそれっきり後はどうなつたかさっ
ぱり解らなくなつて仕舞つた。
後で、他の人に介抱して貰つて、氣が付て見ると、
私の顏がこんなに掻き取られてありました。幸ひに

命丈は助かつたが、その時の恐しさ、無念さとい
ふものはとても忘れる事は出來ない。これが私の熊
捕りについて出會はした第一番目の怖かつたのです
後は又明晩……
恐しくもあるが亦大層面白いお噺を早く聞きた
さに、翌る晩には、日の暮れるのを待ち兼ねて、
昨夜の約束の通り、お酒を手に提げて、アイヌの
お爺さんの家へ行きました。するとお爺さんは大
變酒好きの人でしたから、大悦の顏をして次ぎの
噺をしました。

熊のためにサンく〜な目に逢はされてからといふものは、一時は熊が大變怖くなつて、もうとても熊捕は出來ないと思つたが、しかし考へ直して見れば、まことに心外で心外でたまりせんから、そこで傷が直るか否や、今度こそは」と、又元氣を取り直して、熊捕に出掛けた。

ところが不思議や、傷を受ける前まで大變怖くて、ヒク〳〵して居たのが、すつかりはつて、大きに度胸が座つて來て、何時熊に出會はしても、ヒクともしないよーになり、そこで今度はほんとうに面白くなつて、度々大きな奴を捕つたことがあります。

或る日、例の通り、奥山に這入つて熊捕をして居た時に、又向ふの谷底に一疋の大熊を見付けた。其とき私との間は大凡二三十間もあつたでせう。逃してはたまらぬと思ふて、私は直ぐに身構して、射やうとした。熊の方でも、「ガロリ」と私を見付けた。私が今、矢を放たうとして居た所ですから、先きでもう堪らぬと考へたと見えて、例の通りに毛を逆立て、恐ろしい顔して、こちらを見掛けて登つて來る。私は「今だ」と思つて、有る丈の力を絞つて弦を曳

いた矢は「ヒユー」と音して放れた。

大丈夫、中つたと悦んだが、それは私の思ひ違ひで熊は平氣で上つて來る。

「シマツタ」と思つて、次ぎの矢を放たうとしたが、其中に熊は、もう間近く迫つて來ました。其間は僅か四五間しかない。今はほゝ

とても次ぎの矢を放つ丈けの暇はない。

と云つて逃げる暇は猶更ない。熊と競走したもんなら、熊は私よりは、五倍も六倍も速く走るから、もう熊に組み付いて諸共にうち死するより外仕方がないと覺

悟を極めた。そして思はず腰の回に手を下げたが、こゝに一つ大變のことが起りました。

それはつい今が今まで、腰にぶら下げて居たと思つた大切の大切の「マキリ」（小刀）が見えないのです。いくら大膽な者でも、かうなつては驚かんでは居られない。私も「がつかり」して、もう「だめだ」と斷念めました。

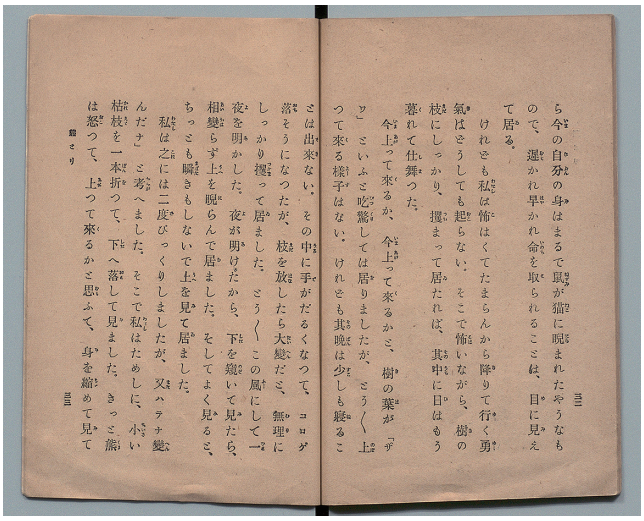
ふと邊りを見廻はしたら、大きな木が立つて居たから、高に一つも私の命を助けて與れるものは、此木より外にはないと、もう後先の考もなにもなしに、

いきなり其木に飛び付いた。私が一生懸念になつて、木の枝に攀き上つて、二間許り登つたと思ふ時分には、もう熊は木の根本へ飛んで來た頃だ。私は怖はくて〳〵とても木の下を顧る暇はない。一目散に木の端に攀ぢ上つた。

木の枝の繁つた所で、こゝならばしっかりつかまって居きへすれば、落ちることはあるまいと思ふ所へ、一先づ身を落ち付けて、ソット下を窺いて見ると、案に違はず、熊は木の下に來て居て、キラ〳〵した眼を輝かし、眞白い牙をむき出して、今にも喰

いつくといはぬばっかりの顔をして、私の力を覗んで居る。

先づ一安心とは云つたが、それはとてもだめらしい。何故かといふに、熊は鋭い硬い爪を持つて居るから大きな木なら、すぐ抱き付て、爪を「グアグア」木に差し込んで、登つて來ることは、わけはないのである。若し又樹が細くて抱き付かれぬ時には、樹の根本を兩手で攫んで、恐しい力で樹をゆす振ろうもんなら、樹は忽ち折れて仕舞ふ。よし又折れぬにした所が、振り落さるゝことは極まつて居る。だか

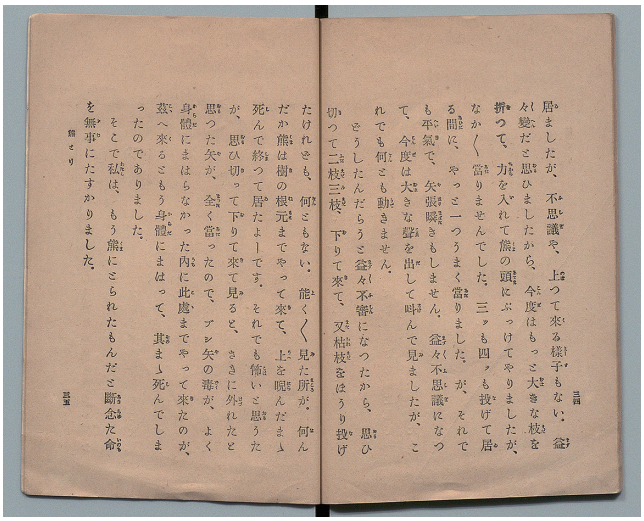


ち今の自分の身はまるで鼠が猫に睨まれたやうなもので、遁かれ早かれ命を取られることは、目に見えて居る。

けれども私は怖はくてたまらんから降りて行く勇氣はどうしても起らない。そこで怖いながら、樹の枝にしっかり、攫まって居たれば、其中に日はもう暮れて仕舞つた。

今上つて來るか、今上つて來るかと、樹の葉が「ザワ」といふと吃驚しては居りましたが、どう〳〵上つて來る樣子はない。けれども其晩は少しも寢ることは出來ない。その中に手がだるくなつて、コロゲ落そうになつたが、枝を放したら大變だと、無理にしっかり攫つて居ました。どう〳〵この風にして一夜を明かした。夜が明けたから、下を覗いて見たら、相變らず上を睨らんで居ました。そしてよく見ると、ちっとも瞬きもしないで上を見て居ました。

私は之には二度びっくりしましたが、又ハテナ變んだナ」と考へました。そこで私はためしに、小い枯枝を一本折つて、下へ落して見ました。きっと熊は怒つて、上つて來るかと思ふて、身を縮めて見て



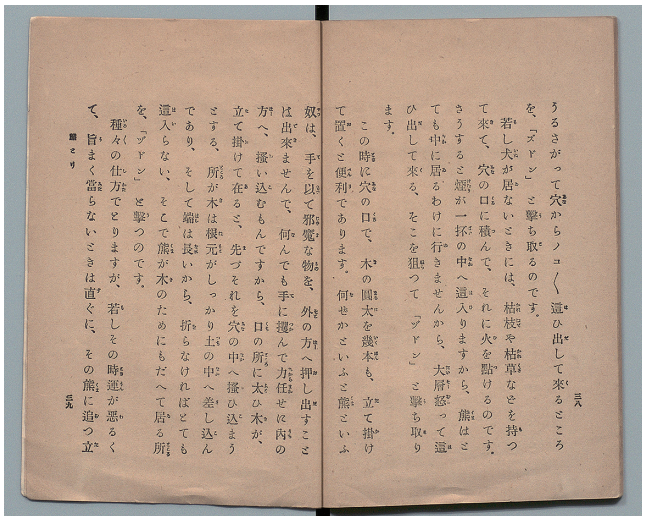
居ましたが、不思議や、上つて來る樣子もない。益々變だと思ひましたから、今度はもっと大きな枝を折つて、力を入れて熊の頭にぶっけてやりましたが、なか〳〵當りませんでした。三ッも四ッも投げて居る間に、やっと一つうまく當りました。が、それでも平氣で、矢張瞬きもしません。益々不思議になつて、今度は大きな聲を出して呼んで見ましたが、これでも何とも動きません。

どうしたんだらうと益々不審になつたから、思ひ切つて二枝三枝、下りて來て、又枯枝をほうり投げたけれども、何ともない。能く〳〵見た所が、何んだか熊は樹の根元までやって來て、上を睨んだまゝ死んで終つて居たよーです。それでも怖いと思うたが、思ひ切って下りて來て見ると、さきに外れたと思つた矢が、全く當ったので、アレ矢の毒が、よく身體にまはらなかった内に此處までやって來たのが、茲へ來るともう身體にまはって、其まゝ死んでしまったのでありました。

そこで私は、もう熊にさられたもんだと斷念た命を無事にたすかりました。

序に熊を捕る仕方を、お
三六
噺して上げませう。
アイヌが熊を捕るには種々の仕方があります。ブシ矢で以て捕りますのは、昔しのアイヌが専ら用ゐた仕方でありますが、今では多く鐵砲で以て捕ります。鐵砲を肩にして、熊捕に出掛けるときには、大概大きな、

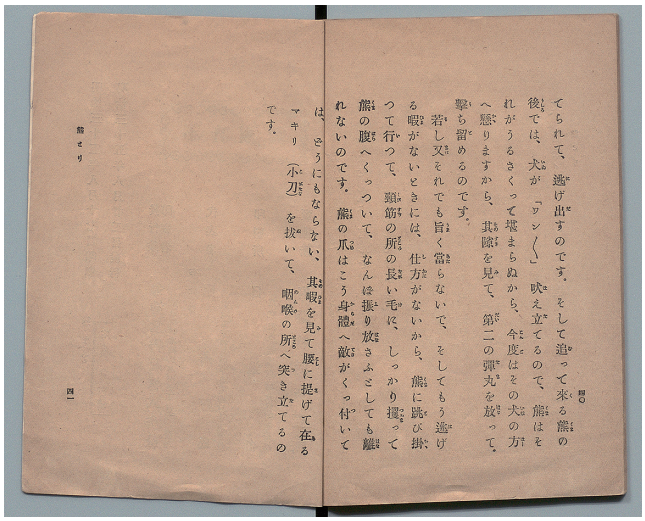
よく慣らした狩犬を二疋も三疋も連れて行きまして、熊の穴を見付けると、犬を穴の口へ遣つて「ワン〳〵」吠えさせ、そして自分は遠か後の方に居て、狙を定めるのです。中に睡むつて居る熊が、犬の「ワン〳〵」といふ聲に目を醒まし、そして犬の吠え立てるのを、



うるさがつて穴からノコ〳〵這ひ出して來るところを、「ズドン」と撃ち取るのです。
若し犬が居ないときには、枯枝や枯草などを持つて來て、穴の口に積んで、それに火を點けるのです。さうすると煙が一杯の中へ這入りますから、熊はとても中に居るわけに行きませんから、大層怒つて這ひ出して來る、そこを狙つて「ズドン」と撃ち取ります。
この時に穴の口で、木の圓太を幾本も、立て掛けて置くと便利であります。何せかといふと熊といふ

三八

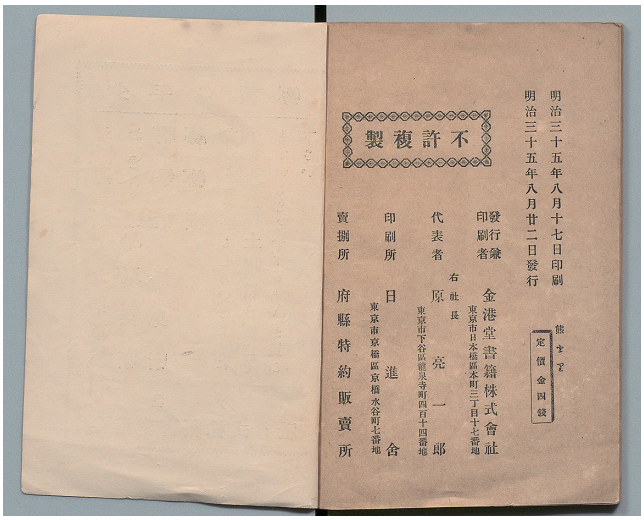
奴は、手を以て邪魔な物を、外の方へ押し出すことは出來ませんで、何んでも手に攫んで力任せに内の方へ、掻い込むもんですから、口の所に太い木が、立て掛けて在ると、先づそれを穴の中へ掻ひ込まうとする、所が木は根元がしっかり土の中へ差し込んであり、そして端は長いから、折らなければとても這入らない、そこで熊が木のためにもだへて居る所を、「ズドン」と撃つのです。
種々の仕方でとりますが、若しその時運が悪るくて、旨まく當らないときは直ぐに、その熊に追つ立

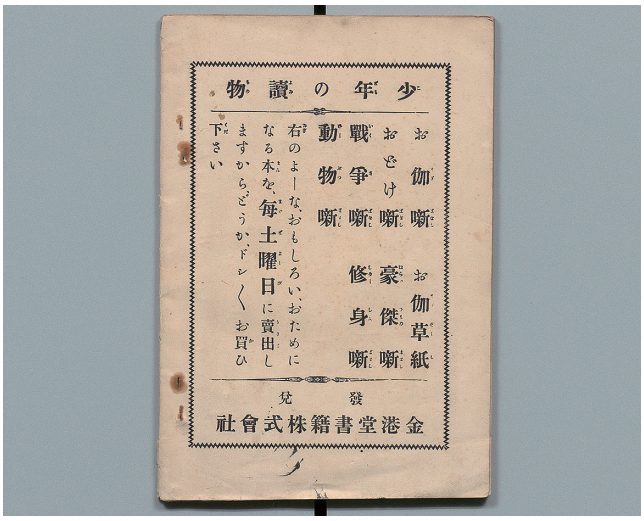


てられて、逃げ出すのです。そして追つて來る熊の後では、犬が「ワン〳〵」吠え立てるので、熊はそれがうるさくつて堪まらぬから、今度はその犬の方へ懸りますから、其隙を見て、第二の彈丸を放つて、撃ち留めるのです。
若し又それでも旨く當らないで、そしてもう逃げる暇がないときには、仕方がないから、熊に跳び掛つて行つて、頸筋の所の長い毛に、しっかり攫つて熊の腹へくつついて、なんぼ振り放さふとしても離れないのです。熊の爪はこう身體へ敵がくつ付いて

四〇

は、どうにもならない、其暇を見て腰に提げて在るマキリ（小刀）を抜いて、咽喉の所へ突き立てるのです。





②「前祝いと後仕舞」

＜解説＞

牧口澎湃「前祝いと後仕舞」。『園遊会』119 ～ 127 頁に収録。『園遊会』の奥付を見ると、発行年月日は 1902 年 10 月 10 日発行。発行兼印刷者は、金港堂書籍株式会社。代表者は、原亮一郎。印刷所は、東京国文社。目次の記載は牧口生。本文の記載は牧口澎湃。小説集『園遊会』については本解題を参照されたい。

作品の冒頭で「事実談を書いて見ませう」と述べているので、基本的には実際にあった話をもとに構成されていると考えられる。おそらく牧口は当事者あるいは第三者からこの話を事実として聞いたのであろう。北海道の枝幸で起こった鯨の死体をめぐる、アイヌの金持ちと周旋家の何某の騒動を喜劇風にまとめている。

＜本文＞

前祝と後仕舞

牧　口　澎　湃

ちと、此園遊会には、つきが悪いやうでありますが、余り題に窮した揚句、せめてもの責め塞ぎにと、面白くもない事実談を書いて見ませう。尤も強ひて附会したなら、まんざら、此会に無関係のことでもありますまいから。

北海道は技幸といへば、黄金の山の所在地として、今では誰れ知らぬものもない所であるが、技幸は単に黄金の山ばかりでなく、昔から鰊や鮭の大漁の場所で、後の山に対して云へば、前に黄金の海を控へて居るといふてもよい程である。だが、其海岸が砂浜で平直で、近所に良港がなくて、それに北海道中でも尤も僻遠の所と来て居るから、逐、此頃、砂金の発見する迄、世に知られなかつたのである。で、素早く此地に先鞭を着けたものは、人の知れざる大儲をしたものである。其事は後に記るす如く今尚ほアイヌに大金持が在るのでも解かる。殊に近海に出没して居る大群の鯨が、オコツク海の北方から来る流氷に衝突して倒れたのが毎年冬から春にかけて流れて来て、村民は時ならぬ手入らずに、巨利も博することは珍らしくなかつたことである。是について彼の地に一つの面白い談柄がある。

時が来ても春風は未だ極北の此地を見舞ない、或日の夕方、例の通り一頭の大鯨が、小山の如く海面を遙かに流れて来た。北見の海岸では北風は真向ひに吹いて来るから、見る間にずんずんやつて来る。慣れて居る村民は、スハこそ宝の山ゴザンなれと、海岸に群がつて待つて居る。

大鯨はだんだん近づいて来るが、さて残念なことには日は徐々暮れかゝる。後の山々には未だ雪は皚々として居る位で、北風は肌を擘く程の寒さであるから。永々の越年に鍛へ上げた身体には気ははやれど、此寒さには叶はないから、肉をきり取ることは翌日に延ばした、一日千秋の思ひとは、此等をいふのであらう。

折角掌中に入れた宝を、ムザムザ流しては残念至極、若し此儘にして置て、夜半に風でも変つたら、福の神に対しても相済まぬことゝ、気をいらだてゝ居るものも多い。

そこで一人、村中でも評判者の周旋好き、勇み肌の何某が、村中も西と東へと奔走した結果として、村中にありとあらゆる綱は悉かり集まつた、が、それではまだまだ大鯨は繋なげぬといふので、こんどは細引でも藁縄でも苟くも細く長いものといふものは、彼処の小屋、こゝの物置、残る隈なく捜し出して、集めて見れば随分仰山である。これで兎も角も鯨を喰ひ留める丈けの大綱は芽出度出来上つた。

大綱は出来上たが、さて今一つは、其大綱を繋ぎ附ける場所を見けねばならぬ。何分小山の様な大鯨を繋ぎ留めるといふのだから大騒ぎだ。彼処の大樹、此処の岩角と、村中屈指の物識共が額を集めての大評議。やがて議が一決したのは、村中第一の金満家の大建物であつた。その又金満家といふのは、此辺での、親方々々として仰がれてゐる所の、アイヌの大漁夫である。大鰊捕丈けあつて、さすがに大きな納屋を持つて居る。此辺では廊下といつて、水上げまゝの鰊も積み上げて置く所である。何でも長さが三十幾間といふことだから、村中では之に越し

た建物はない訳だ。それに、鰊の漁期前の雪中に、幾十人といふ屈強な漁夫を使役して、暇と力とを惜まず伐り出して、形状はどうあらうと一向お構ひなし、唯丈夫一方に建て上げられた物だから、これならば如何な大鯨でもといふので、決まつたのである。

決まつたは決まつたが、さてそんなら其親方が旨く承諾して呉れるか、どうだかといふことは、尚ほ未定の問題である。一難去つて一難来るで、是れは又一つの苦心で、ある。といふのは、土人で金満家になる丈けあつて、仲々喰へない奴、慾張爺で頑固で、自分の気に向かぬ事なら他からどんな勧めがあつても、ビクともせぬといふ気質。これには村民も持て余ましては居るが、何と云ふても金持と来て居るから、蔭では何と云はうが、表面では頭を下げて、おだてゝ置かねばならぬ。といふ塩梅だから中々の難物である。

斯う云ふ時には持て来いと、重宝がられるのは例の周旋家の何某で、早速其大親方の許へ全権大使として派遣せられた。さて其親方は一旦は後ずさりしては見たものゝ、某の達者な弁舌に説き付けられて見れば、まさかに山分けの大割前が欲しくない訳でもない。さすがに頑固の親方も慾得づくから、まん更貸ことが出来ぬと、はね付ける勇気もないらしい。そこを見て取つた利功者の何某は、一も二も自分一人で含みこんで、否や応なしに決めて仕舞つた。

難関が無事に通過したので、舟を下ろす、綱を積み込む、海へ飛び込む、綱をかける。かうして、頭から、胴から腹から尾から幾十本といふ綱を掛け違へて、其端は悉く大親方の廊下の柱に結び付けた。イヤ早や其騒ぎといふはすばらしいものである。これでこそ大丈夫、まあ一安心、併し日は暮れる、寒さは寒し、お腹は減いたといふので、銘々思ひ思ひに宅へ帰りかけた。何れも満面喜色を帯びて、いつもの不景気はどこへやらといふ風で。

皆なは明日を楽んで帰つて仕舞つたが、茲に一人じつとして居られない性分なのは、例の周旋家の何某で、

『エー此芽出度い時に宅へなんか、くすぶつて水つぽい清酒が呑めるもんかい』といつて、又跳び出して東奔西走。そして第一に説き伏せたのは、例の吝嗇家の親方だ

『何のこれしきの物が。えゝ明朝は早速鯨の油を此の酒樽へ詰め交へて、利足には鯨の肉をどつさり添へて屹度慥かにお返済申しまさあ』

此口調で以て、まんまとせしめた分捕品は、倉庫の奥に仕舞込んで、死んでも放すまいといつて居た、土人の大好物の薦冠りの五六挺である。

村中第一の難関を攻め落した元気で、次へ次へと説き廻はつた何某の功労によつて酒が出る、肴が出る、寿司が来る、餅が来るといふ風で忽ち村中の小園遊会が成り立つた。

月がさえたか、花がかすんだか、そんなことは彼輩の眼中にはない。サア飲めや歌へや跳れや騒げやで、どんちやんどんちやん全然、鎮守の祭礼と、学校の運動会と盆と正月とが一時に来た様である。夜は更ける、宴は酣になる。村民の宅では又、家内のもの共か出刃鉋丁を研ぐ、錆び刀を取り出して磨き立てる、我れこそは、あつぱれ最大の収穫して呉れんずと心を砕いて居て、床についても睡れぬといふ始末。其夜の夢は如何であつたらう。

夜が明けた。風はぐらりと変つた。夢が醒めた。昨夜の影響の睡け眼をこすりこすり戸外へ

出て見れば、こはいかに、こはそもいかに、宝どころか、金満家の大建物が、鯨に確つかと繋がれたまゝ、そつくり其儘、二三十間沖の海面にプんプん漂ようて居るのである。驚いたとも驚いたとも、それはそれは開いた口の塞がらぬほど。その村民の顔付きといふものはない。中にも一番気の毒なのは大建物を持つて行かれた金持の土人よりも、周旋家の何某である、吝嗇家の大親方に対しては何ともかとも顔の合はせ様がないといつて、とうとう村には居たゝまらなくなつて其朝何処へか出奔して仕舞つた。

前夜のお祭騒ぎに引き換へ、掌中の玉を奪はれたる失望落胆の村民にも、捨てる神に救ふ神とやらで、其晩になると又々ぐらりと風が変つて、再び福の神が舞ひ込んで来た。が、大暴風になつて、風は真受けに吹き付けて来たもんだから、今度は人手入らずで、大鯨は自然と砂浜へ打ち上げられて、其上から無二、無三に大濤が打ち重つたので、砂の中へ深く埋められた。其代りに、これからは如何なに風が変つても大丈夫になつた。そこで折角研ぎ磨いた鉋丁も脇差しも、再び役に立つて、芽出度宝が手に入つて、肉も油も、骨も鬚も、村中総出になつて収穫したが、巨濤が鯨を砂の中へ埋めて呉れた代りに腹腸を取ることが面倒であつた。最早旨い所丈けは採つて仕舞つたし、其中に樽と樽、塩と塩、近所近辺にありとあらゆる物は悉く集め尽して、此上何程とつたとて、仕方がないといふので、其儘砂中に抛棄てゝ置くことになつた。

これまではよかつたが、其中に春も過ぎ、気候が暑くなつたもんだから、砂中に埋まつて居た鯨の腸がそろそろ腐敗しかゝつて来たもんだからたまらない、偶々西風が吹かうもんなら、其腐敗した臭気を、そつくり村中へあびせかけるので、イヤハヤ、臭いの臭いのといつて談しにも何にもなつたもんでない。俄かに西向の窓を閉ぢたとてもう駄目、何にしろ村一杯の悪臭だからおたまりつこはない。これからといふものは、此村では西風と来たら虎烈刺やペストよりも恐れて大閉口をしたといふことである。まあこのつまらない一対の談でも見様によつては其中に幾分の真理を発見することもあらうと思つてお茶をにごしました。　（をはり）

③「手紙の書き方」

＜解説＞

ほうはい子「手紙の書き方」。『少女界』第1巻第10号、金港堂、1902年12月11日発行、62～66頁に収録。目次の記載は、はうはい子。本文の記載は、ほうはい子。

本作品では、『少女界』の読者を対象に、手紙を書く際の紙の選び方、手紙の書き方の形式について丁寧に指導している。

＜本文＞

手紙の書き方

ほうはい子

皆さん、毎月々々よくまあ、手まめにお稽古をなさいますので、本誌の少女文林は、毎号に

ぎやかになりまするし、それと共に、皆さんの御手際が、めつきり御進みになりましたことは、私　共のまことに欣ばしく思ひます所です。

文章の方は、このよーにして、進歩なさるし、又学校でも毎日お稽古をなされますから、それは心配は入りませんが、さて手紙の書き方になりますと、皆さんの御投書の中には随分如何はしいのが、折々見受けられるよーです。これは、つまる所、本誌へ投書なさるので、正式の手紙でないのですからでもありませうが、それにしても、前々から心掛けてお居でなさらぬと、その為めに思ひも寄らぬ、不都合が出来るかも知れません。で、その手紙の書き方について、心づきのまゝ、少しばかりお話致して上げませう。

手紙に使う紙は、本式にやかましく言ふと、色々ありますけれど、今では種々の巻紙を、誰れも使ひますから、それでよしとして、其色合ひなんぞも、昔しは鼠色のは、何にか、不幸事などの時に用ひる例になつて居つたそーですけれども、今では誰れもさう儀式ばる方もありませんから、白紙と共に色々のを用うよーですが、併しどちらかと云ふたら、目上の人にやる手紙などには、成る丈けそんな不吉な色を憚つて、白いのがよろしうございます。

次ぎは巻紙の中へ字の書き方ですが、随分初めの人等には、初めから終りまで一行もあけずに、みッしり書きつめるものもありますが、之れはまことに見悪くいもので、まあ、巻紙の天地と申します、上と下とは、大概どちらも凡そ五分程づゝ明けておいて、あまり詰らないよーにし、それから、始めと終りのところには大概二寸程づゝ余白をのこして置くのが例であります。そうしますと、巻いたときに、字がすぐ上に表はれないで、丁度一皮下から、あることになつて、見よいのでございます。

その巻紙の巻き方は、其手紙を見る人が、初めからすぐ、読めるよーに、終の方から巻いて来るのが便利でございます。これも儀式を正しますと、終の方の端からして、始めの方の紙の端を五寸程余した処へ真二に折り返して、その上を左の方から状袋に入いる程に巻きます。そして不幸事には、真二に折り返さずに、直ぐ左の端から巻き収めることでございます。

手紙の字は、行書で書くのが、一番丁寧なので、普通の手紙は草書で書いてよろしいのです。たゞ向うの人が読むに困るよーな、走り書きは誰れも慎しまねばならぬことですが、殊に少女方の手紙には気を付けねばなりません。さうでないと人様に失礼にもなり、自分のそゝッかしいことが、表はれる訳でありますから。階書は活版に摺るときにしか用ひません。

さて書き始めや、本文や、時候のあいさつや、お仕舞の留め書きなどは、まあ、置きまして、お仕舞の日附の書き方を申しませうに、此日附といふことは、後々の証拠となるものですから、必ず書いてやらぬといけません。して其書き方は、本文の文字の頭から一字程下げて、少し小さく書くのです。尤も日附けは、其日に向うて達する郵便だの、使に持たせてやる時などには、単に何日とか「けふ」とかでよろしいことがありますが、普通の文では月日を書き、表立つた手紙や、年始状などに明治何年と、年も書いて遣るのです。

さて又、自分の名の書き方は、丁度月日が、名前の肩の上に当るよー、月日の下の方に、少し間を明けて、名前の終りが、本文の地の処につくよーに、字を中の文句の字よりか、小さく書

くのが礼です。そして普通の手紙では、姓と名とを書きますが、親類だの、先生だの、近しい友達だの、自分と親しい間柄のものには、たゞ名前丈け、書くのがよいのです。近頃は自分の名の下に子といふ文字をつけるのが随分見えますが、之れはもと他人から、親愛して呼ぶ詞なのですから、自分の方へは書かぬ方がよろしいのです、また、姓ばかし書いて、名を書かぬ人もありますが、これは人によると随分失礼に当りますから、まあせぬ方がよいのです。

先様の宛名は、自分の名前の行から、一二行ほど明けて、左の方に、上は本文の頭から半字程下げ、月日の頭よりは半字上り位の所から、書き初め、なるべく自分の名前の頭と並ぶまで位に書き収めるよーにするのが礼です。尤も宛名の長い人や、肩書を書かねばならぬ人もありますから、一様には云へませんが、とにかく先方のお名前をずつと下まで下げるのは失礼のことです。

普通の式では、先様の姓と名とを書くのですが、目上の人で敬ふ時には、姓丈け書きますし、又自分のごく懇意の人には、名丈け書き、それから同じ家族の者には御父上様とか、御兄上様とか、お叔父上様とかいふよーに書きます。

宛名は、なるべく字格をくづさないで、正しく書くのが礼です、殊に目上の人には、階書か行書で書のがよいのです。そして、本文の字よりは稍大きく、きれいに書くのです。すべて、宛名を書き損じて書き直したり、消したりするのは、大変に失礼なことですから、気を付けぬとなりません。

宛名の下に、敬ひの語を添へなけりやなりません。これには「様」「殿」其他種々ありますが、公用文――表向きの書付には、殿を用ひますし、私用の文、殊に親しい間柄には様を用ひます、同じ様の字でも、父母師長等の尊い人々には、立様と称へて「樣」の字を用ひ、其他の目上の人や、友達等には「様」「樣」等を用ひ、目下の人々は座様といふて「𣪍」の字体を用ひます、之れ等は男女共に用ひるのですが、女は特に丸様と称へて「𣪍」の字体を用ひるのがむかしからの習はしであります。殿と様とは、どちらも、尊ひ人にやるに用ひるのですから、何ちでもよいよーなものゝ、様には尊敬と共に親しい間柄の意味合があるのですから、先生等に殿と用ひるのは、尊敬したよーで、却つて失礼にあたるものです。殿にも種々の崩し方がありまして、向うの身分によつて、色々用ひ方がありますが、目下の人には殊に、丸殿と称へまして、「𣪍」「𣪍」「どの」などの字を用ひるのです。

様、殿等と同じことに、宛名の左の下の方に書き添へる語がありますが、之れは脇付けと申しまして、やはり、付けるが礼であります。これも身分によつて、種々の文字がありまして、尊い人へやる手紙には、「侍史」とか、男の手紙には、座右、机下、座下、梧右等の字がありますが、女の手紙には、通例は、御人々、御許に、等を用ひ、父母師長等には「御前に」を用ひます。まあ、今度はこれまで。

④「瓜生岩女史」

＜解説＞

澎湃子「瓜生岩女史」。『少女界』第2巻第1号、金港堂、1903年1月1日発行、119～121頁に収録。本文の記載は、澎湃子。同号巻末には、新年号の附録として「日本十二名媛」がある。「日本十二名媛」には、日本を代表する12名の女性の小伝が掲載されている。その12名とは、橘姫（草村北星）、衣通姫（服部躬治）、和気広虫（斎藤弔花）、紫式部（福田琴月）、清少納言（岡本三山）、小式部内侍（神谷鶴伴）、常盤御前（森桂園）、楠木正行の母（井上折山）、弁内侍（池田蘇雲）、春日局（平尾不孤）、政岡（綾部やほ）、瓜生岩女史（澎湃子）、である。（　）内は作者を示した。

執筆は金港堂出版物の編集に関わる人物が担当している。「瓜生岩女史」はそのうちの1編。本作品では明治期に活躍した瓜生岩子（1829-1897）の生涯と慈善事業を紹介している。

＜本文＞

瓜生岩女史

澎　湃　子

吾等は、日清戦争の、はなばなしい勝利を思ふと共に、其時の軍に出た将士の、非常な艱難を、忘れてはなりません。明治廿七年から、廿八年にわたッた冬、満州原野の雪中の寒さといふものは、とても、吾々暖い国に生れたものゝ想像の出来ることではございません。何なに身体をつゝんで居ても、凍りのために、耳を落したり、指を腐らしたりしまするのに、戦場の事とて、固より着換もなし、穿き換もなし、殊に皮の靴なぞは、忽ち石のよーに凍り固まつて、とても寒気を凌ぐことが出来ませんから、兵士の中には凍傷を起したものが沢山出来て、この儘にしておいたら、全軍悉く、指を落し足を腐らして仕舞ふ許りで、其苦しみは、目もあてられぬ程でありました。

かよーに支那の大軍よりか、寒さといふ大敵の為めに、大へんな苦みをして居る最中に、或る日、本国から数万足の雪草鞋が送られて来ましたので、其時の将士の悦びといふものは何とも例へ方がなく、「何な恵み深い人の思ひ付きやら」といつて、有りがた涙に暮れた者が多かつたといふことです。この将士の大恩人こそ、即ち瓜生いは女史で、あの西洋で名高い、ナイチンゲルに比ぶべき女丈夫でございます。

女史の生れは、雪の深い、福島県でございますから、満州の兵士が、雪の為めに、苦んで居ることを殊更深く感じて、「どうかしてそれを助けてやりたいものだ」といろいろ心を砕いて、とうとう一つの草靴のよーなものを考へ出したのが、即ち右の雲鞋でありました。が、何分大勢の兵士にやるのですから、これはとても五人や三人の力では及ばないと思ッて、身は七十余りのお婆さんでありながら、毎日毎日東西と説き廻はッてあるいて、とうとう数万足の草鞋を揃へることが出来たのです。

この一事を以ても、女史が何な人だといふことのあらましは解りませう。女史は、幼い時から

志　が確りして、学業もすぐれ、品行も正しうございましたが、年頃になつて、瓜生家に嫁りしてからは、ますます温順しく、夫や舅 姑 に事へ、婢僕を使ふにも憐み深く、そして自分では、よく勤倹で家政をおさめましたから、一家は和合し、外からのほまれも高うございました。

ところが三十四の時、図らず、夫と死別れしましたので、女史は大そー悲しみ、一時は尼にでもならうとしましたが、根が気象の勝れた人ですから、また心を取りなほして、徒らに尼となッて朽ち果てるよりは、力の及ぶ限り、人も助け、世の為を図ッて君と国との御恩に酬ひやうと、決心して、それからは、いよいよ操を堅くし、自分の身の飾などは少しも構はずたゞたゞ、慈善の事業に其身を委ねて、死ぬまで怠るこがありませんでした。

三十余年の永い間、女史が怠りなく、仕遂げられた、慈善の事業は、大したものでございますが、中にも、女史は、憐れな孤児や、貧乏な子供を深く不憫に思ふて、それ等を自分の所へ、呼び寄せ、自分の子のよーに教へ育てゝやりましたのが、十数年の間に、幾百人といふ数に達したといふことです。

世にも稀れなる、恵み深へお方でございますから自分では、成るべく名立たぬよーに、蔭徳を施して居たのでございますけれども、いつしか、其事が、世に顕はれて、方々から賞状やら、贈 物やら、数多くございましたが、殊に、明治廿九年には天聴に達して、藍授褒賞を賜はり、又　皇后陛下からも特にお物を賜はりましたといふことでございます。

真に女史の如きは、明治の吾等には、最も新しい亀鑑ではございませんか、浅草公園に、女史の銅像が立ッて居ります。東京の皆さん。お正月のお休みに、一度拝詣して、この立派な鑑に照らされよーではございませんか。　（完）

⑤「雪の色々」

＜解説＞

ほうはい子「雪の色々」。『少女界』第2巻第1号、金港堂、1903年1月1日発行、42～48頁に収録。目次の記載は、澎湃。本文の記載は、ほうはい子。「雪の色々」は『少女界』第2巻第1号および同第2号の2回に亘って掲載。10項目で構成された文章で、同第1号では、第1～第7の項目が収録。

「雪の色々」は、雪と人生との関わりを読者である子どもが理解できるように分かりやすく説明している。1903年10月に文会堂から出版された牧口常三郎著『人生地理学』の第19章「気候」の第10節「雪と人生」と明確な関連性を持った作品である。作品中で6つの歌が引用されているが、紀貫之の「雪ふれば冬ごもりせる草も木も／春にしられぬ、花ぞさきける」は、同書でも採用されている。本作品の位置づけについては本解題でも述べているが、掲載が1903年1月～2月であるため、この段階では2000頁程の『人生地理学』の草稿を元に書いたであろうことが推察される。

＜本文＞

雪の色々

ほうはい子

一　雪の美

山里は、冬ぞさびしさまさりける
　　人目も草も枯れぬとおもへば

と、昔の人も歌へましたが、ほんに其通りで、山里許か、街でも都でも、冬ほど淋しいものはありません。ついこの頃まで、錦を織り出したよーに、野も山も紅葉で飾り立てられてあつたものが、木枯が一度吹きすさんでからは、惜げもなく、たゝみ納められてしまつて、後に残るものは痩せこけた幹と、枯れ果ては枝ばかりとなり、世の中は、何となく、淋しく、殺風景で、人の心も、誠に悲しくなつて参ります。

ところへ、一朝起き出て見ると、今までとうつてかはつて、林も森も野も山も、見渡す限り、しろ金の世界となり、高い山も、貧い家も、玲瓏たる碧もて飾られ枯木は時ならぬ花を着けて賑やかになつて居ります。此景色に逢うたなら、どんな人でも怡ばない者はございますまい。雪が昔から、月や花とならんで、詩や歌に唱はれるのは、尤のことで、

雪ふれば冬ごもりせる草も木も、
　　春にしられぬ、花ぞさきける。

朝ぼらけ有明の月と見るまてに
　　よしのゝ里にふれる白雪

などの名句がありますが、ひとり詩人や、歌よみばかりでなく、狆ころまでが悦んで、ころがり廻り、子供衆も雪を弄んで、冷いのも忘れるといふよーに世の中は忽ちはればれとし、昨日までの淋さは、一夜の中に、どつかへ去つて仕舞ひます。して見れば、雪は冬のさびしさを慰める為めに、天から降つて来るものであると、いふことが出来ませう。

二　雪と松

お正月の松かざりで思ひ出しますが、松や柏の緑をまし、さらに、冬の景色を飾るのも、雪のお蔭といふてよいでせう。もしも松などが、枯れ樹の中に混つて居る許りであつたなら、丁度小石中に混つて居る玉のよーで、何の見ばえもありますまい、真白な皚々たる雪の中に在つてこそ、始めて其緑をほこり、其操を表はすことが出来るのです。

三　雪の結晶

雪は景色が美しい許りでなく、顕微鏡で見ると、なかなか面白い形をなして居ります。あのちらちら降って来る雪の一片は、沢山の小さな結晶から出来て居て、其結晶には、色々の形がありますが、みな六角形になつて居て、まことに美しいものです、これは図で御覧の通りです。（これは結晶を大きくしてみせたの、）何んと其美麗で、巧みなのには、驚かるゝばかりではありませんか。

水蒸気といふて、空気の中の水分が、常には見えませんが、冷くなると、凝つて雲となり霧となりそれが更に凍つて雪になるのです、始めは、ごくごく細かな結晶でありますが、それが次第に集りあつて、雪片となつて、降つて来るのです。で、雪は空中の水蒸気が、寒暖計の零度から下の、冷い空気に、触れて凍つたのですから、霜や霞や、雹、氷などゝは別な物ではなく、又雨や霧などとも、唯だ同じ水分の温度の異つた丈けの者に過きず、いはゞ兄弟分見たよーなものです。

四　雪の国

それで、皆さんは、雪が水蒸気の多い、そして気候の寒い所に多くて、暖かい所や、又寒くつても水蒸気の僅かな所には少ないといふわけは、お解りでせう。

我国では、国のまんなかを、西南から東北へ、丁度脊骨のよーになつて居る山続き——脊骨山脈がございまして、東南の太平洋面の半分は雪が少くて、西北の方の、日本海に面した半分は、雪が大変に多いのであるのは、右のわけであるのです。尤も太平洋の方でも、北に行くに従つて随分多く積ります。日本で、一番雪の多い所は、加賀、越中、越後辺の山の中であるといふことです。そして、多い所では、一丈も二丈も積つて家や小屋などの埋まつて、仕舞ふことなどは、珍らしくはありません。そして此地方だの、北海道などでは、半年間も、雪の中にくらして居るのです。

五　豊年の兆

こんな雪国では、雪見どころではありませんが、しかし、まんざら雪を厭ふ丈ではなくて、却ッて『雪の多いのは、豊作の兆だといふて、悦んで居ります。といふわけは、雪の多い年には、雪の下の地面が、暖かになつて居ますから、麦なんぞは、ちよーど、外套をかぶつたよーに、寒い風に当らず、又寒い中に、ずんずん茎が延びては、後で、実の障になるのが、雪の重みで、延びることが出来ず、それから秋の落葉が、よいあんばいに腐つて、肥料になる、それを雪が溶けて、流して来て呉る等のわけでありませう。して見れば、農民が悦ぶのも一理あることで、雪の国では、雪にくるしむ代りに、農業上に大へんな利益を得るわけです。

六　雪のあそび

それから、北国の子供は、雪のために、いろいろな遊びを得て居ます。まあ、雪達摩、雪合戦等は、どこでも好んでするのですが、もつと勇ましいのは、橇に乗つて、小山を辷り下ること、氷りが鏡のよーに、張り詰めた、池の面や、道路などを、自由自在に辷り廻るの、等です。札幌や、小樽などでは、子供が、下駄や、草履の底に、竹か金かを箝め着け、或は金靴のよーに、出来て居るものを穿いて、つるつる辷つて居ますが、その早いことは、自転車のよーで、いかにも楽しげに見えます。

雪あそび程、清潔で、勇しいものはありません。転んでも、衣服を汚す心配がなく、それに、寒い風にさらされて、身体を鍛へるものですから、健康の為には、最もよろしい。ですから、西洋では、男でも、女でも、お爺さん、お婆さんまでが、冬になると、夜の寒い風なんぞには、ビクともせずに、凍りつめた川の上、池の面などに集つて、辷りをするといふことです。炬燵なん

ぞに、へばり付いて、弱つて居る、我国の人々は、愧しいことではありませんか。

七　雪のめぐみ

かういふ風に見て来ますと、雪の我等に与へる、めぐみといふは、大したものではございませんか、だが、まだ、つきません、ちよツと見ると、貧しひ人々は雪のために、幾多の艱難をするよーですけれども、少し考へて見ると、さう一概に言はれないで、却つて貧乏人を憐んで、とうぞ、それを助けてやつて、呉れえと、世の中の富貴の人に訴へる様に見えます。といふものは、

雪の日やあれも人の子
　　樽拾ひ、

といふ、大変、憐な句がございますが、これは、雪の為めに、今まで知れなかつた、憐な子供に限りない憐みを注いだものでありますのでも知れます。

夜を寒み、おやの衾を重ねても、
　　思ふは賤が夜寒なりけり。

といふ　後醍醐天皇様のお歌や、又　今上皇后陛下の御製に、

綾錦とりかさねても
　　思ふかな、
寒さ被はん
　　袖もなき身を。

と、おほせられたのも、全く雪の夜寒によつて、無量の大御恵を表はし給ひたものでありませう。天は決して、不意に人間を困らせるものでありません、雲の降る前には、きツと先づ霰が降りませう。のみならず其霰がくる前に、霜がくる、秋風が来るでせう。して見ると、天は人間に「もう寒くなるから早く冬の用意せよ」といふて、気を付けさせる様ではありませんか。ですから、此の有りがたい天の御心をさへ、さとつて、雪の降らない前に、要意さへしたなら、決して雪を恨むには及ばないのです。それを、世の中には、随分惰ものが多くて、毎年冬になれば、雪の来るに、定まりきつて居るのに、気が付かないで居るから、その天罰で、雪中に困るよーになるのです。

これには、まだ面白い事があります、雪の降らない、年中暖い方の、熱帯の国でに、人民が野蛮で、一向進歩しません。これは皆さんが、印度や、シヤムや、其他の熱帯地方の国々を、学んだときにお承知のことでございませう。之とあべこべに、英国とか、独逸とか、米国とかいふよーな、世界の文明国と、富強国とか云はれる国々は、皆な雪の降る国々です。で、つまる所、雪のない国は開けないと云へるのです。どういふ理由かと申しますと、熱帯の国々では、年中暖で、冬もなく、雪もないものですから、衣物でも食物でも、冬の要意といふものがいらない。従つて物を貯へて置くといふ心もなく、暖い間に働いて、後で困らぬよーにしやうといふ、勤労の心も起らず、只々何時もかも、怠つて、其日暮しをやつて居りますから、従つて又、富といふものもなければ、進歩といふものもないわけ。ところが、雪の降る国の人民は、雪の降る前に、要意する其心が、自然と勉強にし、貯蓄をするよーにする、ですから、その人民

が発達するのであります。して見れば、雪は人を困らせぬ許りでなく、人間を努力させ、倹約させ、さうして文明に導くのに、大した力のあるものだといふことが解りませう。

⑥「雪の色々」

＜解説＞

はうはい子「雪の色々」。『少女界』第2巻第2号、1903年2月11日発行、36～38頁に収録。同号は石川武美記念図書館所蔵資料を閲覧。目次の記載は、澎湃子。本文の記載は、はうはい子。「雪の色々」は『少女界』第2巻第1号および同第2号の2回に亘って掲載。10項目で構成された文章で、同第2号では、第8～第10の項目が収録。内容については⑤の解説を参照。

＜本文＞

雪の色々

はうはい子

八　雪と歴史

世の中に、雪ほど清らかで、きれいなものはありますまい。雪の特色で、吾々に感動させるものは、この真白で、一点の汚れのない潔白といふことです。見すぼらしい破荒屋も、玉を鏤めた高殿と同じよーに、一度この潔らかな雪が被ふと、忽ち純白な、銀世界となります。ほんに雪は人間の心を清くせよと純潔のお手本を吾々に示すために、降つて来るよーに見えます。雪の潔白といふことから、吾等はあの赤穂の義士と、桜田門の変とを想ひ出します。元禄の昔、四十七人の忠臣が、雪を冒して、吉良 上 野介の屋敷へ打ち入つて、首尾よく、主君の仇を報いたことと、万延の昔、十七人の水戸の浪士が、時の大老井伊直弼を桜田御門の外で、斬つたことは、偶々雪のときに起つたことで、何の関係もないよーですが、実は此人々の心といふものは、君のため、国のためといふ外、一点の穢れがなくて、其 潔 きは、雪の色と異ふ所がないといふことから、雪と離れないのかもしれません。

雪についていま一つ忘れられぬのは、あの常盤御前が、三人の幼児を連れて、雪の中にさまよふたとこです。これも其時の潔い心が右の義士等と異る所はないからでありましよー。

九　雪と戦争

雪と戦争とが、また密接の関係があるよーです。世界で有名なナポレヲンが、仏蘭西の大軍を率ゐて露西亞へ攻め入り。モスコーの戦争で、大敗北をしたのは、全く此 関 係からです。気候のごく温和な国に、楽しみ暮した、仏蘭西人が遙か北方の、平生寒さと雪とによつて、其身体を鍛へ上げた魯西亞人と、しかも厳寒の最中に戦ふのですから、どんなにナポレヲンが、えらくツても敗けるのは、当り前のことです。

十　雪と我邦

これに就いても、思ひ出さるゝは、我国の前途です。日本は温暖国なる志那人に勝つて、世界

に名を挙げましたが。なほ我邦よりは遙かに北方にて、大へんな寒さと雪とを苦にしない国民があるといふことを忘れてはなりません、もし我国の人民が、仏蘭西人と同であつたなら、甚だ憂ふべきことといはねばなりません。尤も我国民は今までに、二三度雪の戦争を経験しました。豊臣秀吉の朝鮮征伐のとき。鬼 将 軍と呼ばれた。加藤清正が蔚山で、明の国の大軍に取囲まれたことと、近く日清戦争に、遼東の雪の野で苦戦したこととは、其最も著しいものです。幸ひにして皆勝つては居りますが、其辛苦の程は我々の想ふよーなもんではありません。ですから、これよりもずつと寒い処の戦争には、決して安心は出来ないと思はれます。して見れば、日本の男子たるものはふだんから、成る丈け雪を利用して其身体を鍛へ、其胆魂を練つて居つて、一朝 事ある時に備へねばならぬことは、申すまでもありませんが、女たるものもせめては、雪に怖ぢけない丈けの覚悟はありたいものです。

かう想うて来ますと、一帯に温和な気候の我邦に、の中に、寒さの酷しい、雪の多い北海道の在るのは、全く天が、一 朝 何か事ある時の要意の為めに、我国に与へられるものであるように見えます。

昨年の今頃、青森の兵隊が、雪の中の行軍で、大へんな酷い目に遭ひましたが、これも同じよーな訳でありませう。（をはり）

⑦「少女の自修」

＜解説＞

澎湃「少女の自修」。『少女界』第２巻第２号、金港堂、1903 年２月 11 日発行、2 ～ 6 頁に収録。同号は石川武美記念図書館所蔵資料を閲覧。目次の記載は、記者。本文の記載は、澎湃。

「少女の自修」では、自修（独学）の習慣を付けるために、本を携帯することを推奨している。冒頭の引用「書物は世界を観るの眼鏡である」は特定できなかったが、次の引用の「書物を好む人は真実の朋友、親切な先生、面白い伴侶、忠義な臣を欠くことがあるまい」は、アイザック・バロー（1630-1677）の名言である。本作品を書くにあたって、牧口の手元には、読書論として書籍や雑誌でまとめられたものや、その抜き書きがあったのではないかと考えられる。本作品では、牧口の読書観・学問観が窺えるが、その背景となる印刷技術の発達と時勢の進歩をもとに構成された歴史観は、後の『創価教育学体系』第３巻（1932 年、創価教育学会）でも、教育機関の進化論的考察として展開されている。

＜本文＞

少女の自修

『書物は世界を観るの眼鏡である』とは、西洋の学者の曰はれた語であります。今の世に、書物の読めない人、読めても、書物の嫌ひな人程、不 幸 な者はありますまい。

真実に書物を好む人であつて見ると、野に出ても、家に居ても、まばゆき日光の窓下でも、

ほのぐらき燈火の下でも、少しの閑暇さへあれば、直ぐに書物から、色々な面白いこと、楽しいこと、益にたつこと共が得られます。

昔は一部の書物を求めるにも大へんなお銭を出さなければなりませんでした。時によると、いくら高い価を払うても、求められない書物もありました。ですから学問は余程の高貴な人々でなくては出来ませんでした。ところが、印刷の術が開けた為めに、どんなに珍らしい書物でも、得られぬといふことは、殆んどなくなりました。その上、送ることが、便利になつた為めに、どんなに貴い書物でも僅か許りのお銭で、たやすく買ひ求めることが、出来るよーになりました。で、今では貧しい人でも、田舎の者でも、心掛けさへあれば、どんな学問でも、自由に出来ぬといふことは殆どありません。吾等は書物のお蔭で、座にして世界万国の人々と、お話をすることも出来、又千 百 年前の、古の人の教も受けることも出来ます。げに『書物を好む人は真実の朋友、親切な先生、面白い伴侶、忠義な臣を欠くことがあるまい』と申された、西人の語は、確な金言です。

かよーに重宝な、有り難い書物が読めないとは何んと不幸なことではありませんか。それも初から読めぬなら仕方もないが、読める眼を持ちながら、書物を嫌ふといふ者になつては、不幸 といふよりは、申訳のないことではありませんか。ところが、世の中には、そんな不　幸者が沢山見受けられるのは、まことにかなしいことです。

幸 に、皆さま方は、学校の御蔭で、本の読めないといふ不幸者ではなくなつた訳です。が、しかし、一旦学校を下りた暁には、書物を好まぬといふ、今一つの不幸者になりはしますまいか。

見渡す所、たとへ富貴の家のお嬢さま方でさへ、今日の有様では、まだまだ男子程に書物に親しむといふことは出来ないよーです。まして、並々の家庭の少女方になりますと、学校から下つて来ると、何や彼や、家のお使もしなければならず、母様のお手伝もしなければならずで、学科のお復習さへ六ヶ敷い有様ですもの、やがて、学校を下りて、女子の仕事を習ふだんになつたら、余ッ程、しっかりして居ないといふと、どうしても学問に遠ざかり、書物に縁が薄くなるのは免れ難いものです。

一度学問に縁が薄くなり、書物と仲が悪くなると、恰度お友達と仲違をしたよーに、今度は学問が面倒になり、書物が邪魔になり、却てお遊びや、お喋舌等が面白くなつて、再び学問を好み書物に親むといふことが六ヶ敷なります。そうなつたなら、ぢかには見えないが、一生の間には、大した損になるのです。夫れ故、今から、そうならないよーに心掛けて居なければなりません。

そこで私共は、平常から皆さん方が自修――先生に就かないでも、自分独で学問を修める――といふ工夫をなさることをお奨めし度のです。まあ其自修の心掛が出来て御覧なさい。食後の僅の暇でも、旅行をして車の中でも、野に遊んで木の蔭でも、又お台所の竈の側でも何時何所でも先生に就いたよーに、楽しく暮すことが出来るものです。

愛らしー少女方の 懐 ！。其中には何なりと、お好みの物を入れて差支はないのです。お玩具でも、お菓子でも。けれども私は書物に代つて、御頼み申し度のです。『どうぞ書物も皆さんの

お友達にして頂戴な。成うことなら、一番楽しい、有益のお友達として、いつも一冊づゝは懐に置いて頂戴な』と。少女界も微な力ではありますが、皆さまの面白い有益なお友達にして頂きたいと思うて居ります。（澎湃）

をりをりにあそぶいとまはある人の　　本　居　宣　長
いとまなしとてふみよまぬかな

⑧「教員と当事者との衝突を如何すべき」

＜解説＞

澎湃「教員と当事者との衝突を如何すべき」。『北海道教育雑誌』第81号、北海道教育会、1899年10月25日発行、1～4頁に収録。目次の記載は、澎湃子。本文の記載は、澎湃。目次タイトルは「教育と理事者との衝突を如何すべき」となっている。

「教員と当事者との衝突を如何すべき」は、同第80号（同年8月25日発行）に掲載された嶺北生の論説「本道小学校教員転免頻繁の諸原因を述へて之か予防策に及ふ」を承けて書かれている。嶺北生、北陰子は、編集委員の岩谷直次郎のペンネームである。岩谷の論説はタイトル通り、北海道の小学校教員の転免が頻繁に起こる原因を10個挙げて、その予防策について論じたものである。同論説は第80号と第82号（同年11月25日発行）の2回に亘って掲載された。第80号では、10個の原因を列挙し、第1、第2番目の原因を論じている。本作品と関連している第4番目の原因である「当事者及村民と意見協はさる場合」については、第80号ではまだ論じられていない。澎湃は、この10個の原因の中で最も影響力が大きいとして、教員と当事者の衝突について考察し、防御策を提案している。本作品において、当事者とは、町村長等の理事者を指しているようである。澎湃は、転免の防御策として、学校教育における理事者と教員の権限を確定させることを提案した。

＜本文＞

●教員と当事者との衝突を
如何すべき

澎　　湃

政府が年功加俸の制度を設けて鋭意小学教員の一学校に勤続することを奨励するにも不拘、教員の転免は依然として旧の如きのみならす、殊によれば却て益々其数を増加せんとするの傾向なきやを疑はざる能はす。而して其傾向や却て気慨ある有為の者に多きが如く、為に端なく全く教員優待の旨趣を以て生れたる年功加俸法の徳沢が却て不良教員の担保たるに過ぎざる有害の法の如く目せらるゝの結果を生するに至りては豈軽々しく看過すべきことならむや。北陰子前号の紙上に於て之か原因を列挙すること頗る詳細、能く実際を穿てるものゝ如し。余は其中の最も教育上利害を及ぼすと信するものにつきて之か防禦の策を講せんとす。

転免は固より絶対的に一地方に非常の不利を与ふるに相違なし。然とも時には比較的に一地方の害毒を除き却て利益を与ふることあり。教員の品行修らざるに於て其効績却て禍害を購ふ能はざる場合是れなり。斯の如きものを転任せしむることは真の自然陶汰にして当然のことなり。然るに茲に全然転任によりて一地方に不利のみを与ふる所のものあり。何ぞや一人の理事者と意合はさるによりて転任し又は為さしめらるゝもの是なり。是多くは人為的陶汰と称すべきものにして彼の多数の村民と議合はすして転するものと混合して考ふべからす。

人為的陶汰の転免や数多の原因中の一に過きざるも詳細に町村に於ける実際を調査すれば外形に表はれたるものゝみにても決して尠少にあらす。若し夫之に未発の感性不和を加ふれは全道の小学校中能く之を免るゝもの果して幾許かある。他なし一方に監督権を有するに乗し之を楯として教員を自分の配下の如く圧抑せんとすれは、一方には智識学力の多少町村吏の上にあるを頼みて之に下らさらむとする教員あり。一は上長の眷顧を笠に着て権威を張らんとすれは一は政府の好遇を楯とし時には俸給の其上にあるを頼みて之と拮抗せんとす。斯の如くして両々相対峙し呉越の関係をなさざれは嫁と姑との間柄をなす。内心既に然り豈に外形に表れさらむや。然り而して一方は財政の実権を握るか為に若し故意に他を妨けんとすれば易々たり。書籍器械の請求なれは現金なしとして之を棄却するを得べく、理に詰められ論に敗るゝも尚他の方法を以て之を延引するを得べし。是故に衝突の始まるときは教員の敗に帰せさるもの尠し。偶々村民か之を留任せしめんとするも既に上級官聴の決定したるを如何せむ。斯の如きは現象の一斑のみ拙劣なる場合のみ。若し夫多少の材力と気慨とを有するものに於ては、一旦意合はず共に談するに足らずと見るや。外形に表はれさる間に自ら転任をなす。況んや教員欠乏の今日、動けは必す多少の栄進をなすか如き実例多きに於てをや。

衝突も単に当事者其人々間にのみ留まらば尚ほ忍ふべし。然も忽ち之か渦中に投入せられ直接に害毒を被むるものは幾百の生徒なるを想はゞ又恐れさるべからすや。而して人為的陶汰か最も惜むべくして最も不利なるを知らは速かに相当の策を講せずして止む可けんや。今や進んて之か講究をなすに当りて須らく衝突なきものに就きて考察するを要す。全道には衝突なきもの固より多々あり。然とも其中には数種あるを記せさるべからす。

一、双方共に意気相投し若くは才子にして巧に衝突を避くるによりて円活ある場合

一、一方か老朽者、諂諛者、若くは鈍物にして自己の権理と品位とを失墜するも唯利を得んとして理事者の意を窺ふ教員なるによりて円活なる場合

一、一方が人好しの理事者にして唯々諾々なるによりて円満なる場合

一、双方共に余り職務に熱心ならさるか為めに衝突するも実行せんとするか如き事に遭遇せさるによりて無事なる場合

是に由りて之を観れは最初の場合の如きは甚た僅少によりてのみ行はるゝものなれは例外とし、其他に於ては一方の権力が増大したるによりて衝突を避くるに似たり。然らは何れか一方の権力を増大して厳密なる治者と被治者との関係となすべきか。かくの如きの衝突のみは避くるを得へけん、然も之れ到底行ふ可からさるを如何せむ。

自然的の陶汰を救はんか為めに他に之か根本たる教師其人を改良せされは能はさるを以て之を別問題とし人為的の転任に至りては敢て之を禦く術なしとして放任す可らす。蓋し二者職務の限界を超えしめさるによりて容易に避くべけれはなり。両者若し能く此限界線を守りて其分を超えされば何の衝突か是あらむ。唯此分界制や従来甚た曖昧模糊たり。甲の地に於て予算内の支出は校長若くは教員にて自由に行ふに反して乙の地に於ては一枚の紙だに猶六ヶ敷手数と多くの時日とを以て理事者の供給を待たさるべからす。其間の限界が各地区々別々恰かも理事者と教員との申合によりて随意に変更するもゝ如し。嗚呼此の限界線の曖昧や実に教員転免の一大過根たるなり。然らは則ち此範囲を確定するこそ衝突を禦くべき捷路なれ。之を為すに当りて教授管理上の事項の如きは他日視学制度実行の暁ならばいざ知らす、現今に於ては固より教師の職権として容喙せしむべからすとして、其他の学校経済上の事項にて二者を関係せしむるものなれは、之に就ての権利を確定するは最も適切ならむ。

先つ学校の予算を確定するに当り必す総代人会議教員をも出席せしめ勿論待遇上の事は別なるも其他の学校事業につきて可成説明せしむべし。然る後ち尚ほ刪減せらるゝれは之れ不得止として断念せむ。

次に確定の予算額内に於ての使用方は学校長若くは教員に之を委すべし。勿論現金の支払は別なり、相当の時価を以て正当に明瞭の手続を経て買入れしめ、現金の支払に当りて教員の認印等を要するか如きは、更に詳細の細則を設くるは言ふまでもなし。又事の重大なるものに於ては両者相熟議の上に決するも亦便宜に従うて可なり。

果して如斯ならむか人により時によりて権限の張縮あるなく従て衝突の多分は之を済ふこと得む。是以上の事に至りては更に上級の監督者を俟て初めて全きを得む。之に至りて余輩は視学制度の進歩に並行して下級官衙監視の厳を渇望せさるを得ず。某地方の如きは教員戸長との事務の手続を確定して能く其衝突を避くと聞く。余は不平と不満とか各地に充ちて其影響の教育上に及ほすの非常に大なるを見聞すること一再に留まらさるに就き、教育社会か速かに虚心に公平に其弊根を考査して之を刈除するに努力せんことを切望するか為めに、所感を記すること斯くの如し。幸に近く全道教育協議会も開かると聞けは、冀くは尚ほ大に審議して決定せんことを望む。若し又此間に於て名案も出つるあらは更に妙なり。

終りに臨んて某地方に於て教員を信任せさるか故に一切の教具書籍等の請求を排棄する所ありと聞けは之に向て一言の弁なき能はす。成程教員をして自己を反省せしむるの一法ならむ。然とも是一を知りて二を知らさるの見なり。若しも其結果か教師一個に留まらは即ち可ならむ。其余響の直接に多数の生徒に及ほすものあるを如何せむ。若し又其関係か政府と議会との関係ならは窮策の一として用ふることもあらむ。然とも堂々たる監督官庁に於て豈に斯かる卑行をなすべけんや。果して教員其職を尽さすば何故之を責めさる、其人を得されは何故に早く是を黜けさる。策是に出でずして彼に出つるに至りて余は其真意を解するに苦むなり。

（九月十日稿）

⑨「漢字節減と仮名遣改良実施の結果如何」

＜解説＞

澎湃「漢字節減と仮名遣改良実施の結果如何」。『北海道教育雑誌』第 92 号、北海道教育会、1900 年 9 月 25 日発行、2 ～ 5 頁に収録。目次および本文の記載は、澎湃。

「漢字節減と仮名遣改良実施の結果如何」は、小学校令の改正（1900 年 8 月 20 日公布）および同令施行規則（同年 8 月 21 日公布）の第 1 章第 1 節第 16 条で、仮名遣いを一定にし、漢字を節減することが規定されたことを承けて書かれている。澎湃は、同令施行規則に賛同しつつも、小学校のみにしか適用されなかった場合、社会的には学力の低下と非難され、結局は学校外での学習が増えたりするだけになってしまうのではないか、社会全体でこれを進めていかなければならないと注意喚起を行っている。

＜本文＞

●漢字節減と仮名遣改良
実施の結果如何

澎　　湃

久しく待ち設けたる改正小学校令は愈発布せられ之と共に其施行規則に於て小学校の教授に用ふる仮名及其字体並に字音仮名遣を一定し又漢字は可成其数を節減して応用広き者を選ぶべく、殊に尋常小学校に於ては成るべく規定の範囲内に於て之を選ぶべしとて文字の範囲を示されたり。今般小学校令の要点は多々あり然とも多くは大体の主義方針に多少の時勢に鑑みて斟酌を加へたるのみにて之が実行に於ては従前の者と非常なる変革あるにあらす。教育の実務に於て殊に然とす。然るに茲に従来の者に対して実質的一大改革と観るべき者は実に漢字節減と仮名遣の改良とす。吾人は他の多くの条文の改正よりも寧ろ此点に就て文部省の断行を賞讃すると共に是か実施に就きて聊か研究する所あらんとす。

尋常小学校は義務教育の施行所なり。国民の多数は尋常小学校を卒へて学を去る者なれは其影響は直ちに国民の殆と全体に及ぼすと云を得べし。去れは今回の断行の如きも国民将来に非常なる影響を遺すを信す。而も其影響の善悪功過は単に此一篇の法文によりて速断すべからす。若夫善の方面のみを観むか国民の多数は単に有要なる思想を収得する方便たるに過きさる漢字の多数と其他の死語とに費やす労力を減して更に其力を要用なる実質的思想に向くるを得たり。従ひて世界の競争場裏に適応すべき国民を養成するに近づくを得ん。然とも是れ一切の社会に用ゐらるべき文字が改良せられたる暁のことにして若し他に方便の講せられざらんには斯の如きことは誠に前途遼遠のこと丶謂はざるべからす。果して然らば其迄の間の影響は如何

習慣の勢力は恐るべし、数千年間の久しき怪ますして使用し来りし文字を一朝にして改革若くは制限せんとす。決て一部分にのみ施行せらるべき一片の法文の能すべきにあらず。必ずや総ての方面に向つて有らゆる手段を同時に断行するにあらされは能はず。今般の法令にして他に相当の方法の講せらるゝなくんば現在の国民は彼等に毫も痛痒を感せさる従来の文字を使用して顧みさ

るべし。一般の社会は之を顧さるに独り教育社界のみ真面目に之を実施せんか、其結果として尋常小学の卒業者は所謂学力低下の外何者も得へからさらん。学力の低下は直に社会に出て、役に立たずとの非難を意味す。新教則によりて養成せられたる児童は修学中は多少脳髄の過労を減したるも出て、社会に用をなさす、少くは引続き家庭に於て自修をなす能力の減したりとすれは豈有難迷惑の次第にあらすや。此時に於ける直接教養の任に当る教育の立場は如何

教育者か児童を教育するに当りて常に二方面の要求あり。内より児童の心力に適応すべく。外よりは社会の実際に有用なるべしと。前者は教育学の理論と教則の有力なる後援あるも其影響は目前に現はれさるに反して、後者は直接に日常に現はれ、其結果は直に町村父兄の評判となり牽て教師位置にも関す。是故に強固なる理想を有する教師にあらされは忽ち社会の要求に圧せらる。地方の教育者か常套語とする地方の実際に適せず云々との論拠を以て教材の程度を議論するは則ち此事実を表するものにして幾分の無理ならざる所なればなり。故に動もすれは教則の制限あるにも不拘窃かに所定以上に学力を進めんとして課業を与へ以て父兄の歓心を得んとする教師往々ありと聞く。現在に於て猶然り。況んや幾分たりとも更に程度は低下せられて社会の要求は依然たるをや。此時に当り教師の位置は実に板挟の姿となり憐むべき者たらさるべからす。将来の国民を憂ふべき天下の志士仁人并に当局者は能く之を傍観するに忍ぶべき乎。

之を救はんか為に速に採る方法は多々あらん。就中国民をして了解し遵守せしむべき官報を初め法律命令及公文より其他尋常小学校以上の程度の教科書等に至るまて速かに使用文字を制限するを要せさるか。勿論実際に当りては必しも制限し能はざる者あらむ。然れとも不得止名称、熟語等の外は可成仮名を用ゐ夫れ以上は仮名付になすに於ては決心によりては敢て難きことあらすと信す。嗚呼是れ未来のことゝして緩慢に附すべからす。国民教育は直ちに此規則によりて教育せらるれはなり。惟ふに当局者既に時勢の変遷に鑑み輿論の在る所を察し幾多の困難を冒し是迄に断行したる上は更に其結果を見るまでに総ての方面に漕き付けさるべからさるは其免さる責任なりと信ず。否な既に既に定案ありと信すれは吾人は此社会の歓迎に乗し此時期に於て躊躇することなきを望むものなり。

時勢既に茲に至りたれは政府の一挙によりて多分は改革は難事あらすとは信ぜんとすれとも茲に又政府干渉の及ぼし難き部分あり。権力によりて如何ともする能はさる往復の私書或は新聞雑誌等是なり。是実に国民教育に最も密接の関係を有するものなり。是等の言文は或る程度迄は自然淘汰の法則に支配せられ。到底一部の人為の便宜に左右し能はさる部分あれはなり。況んや千余年の習慣あるをや。此の方面の改革は全く輿論の力によらさるべからす。是に於てか吾人は一方の政府の処置と相待ち全国の教育社会是か中心となりて相団結して輿論を喚起し大社会の迷夢を驚醒するに務めんことを切望して止まさるものなり。